

---

# つよきす 愛羅武勇伝

神無鴉人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つよきす 愛羅武勇伝

### 【Nコード】

N0890Y

### 【作者名】

神無鴉人

### 【あらすじ】

もしもレオが幼少の頃に乙女さんに対してリベンジを誓っていたら……………。

そんな考えと某ssの影響で書き始めたつよきすの二次小説です。この小説はつよきすの再構成&主人公、対馬レオの設定改変ものです。

本作のレオはかなり強化していますので、こんなレオは嫌だと思っ方は早めにリターンをお勧めします。

本作には様々な他作品の技が多数登場します（主に格ゲーとキン肉

マン、男塾等）。シッコミ所満載ですがよろしく願います。

## プロローグ 獅子をも凌駕する獅子（レオ）（前書き）

この小説は基本的に主人公のレオの視点と三人称で構成します（一部例外あり）。

## ブローグ 獅子をも凌駕する獅子（レオ）

人生の分岐点は？と聞かれれば俺は間違いなく即座に三つ思いつくだろう。

一つ目：アレはガキの頃、当時ガキ大将的な近所の男子に喧嘩で勝った俺は好い気になって従姉に挑戦し……完膚なきまでに叩きのめされた。

そして馬にされた拳句……「くちごたえするなコンジョーナシ！くやしかったらわたしにかつてみる！」と言われた。

上等だこの野郎……何年掛けてでも強くなって泣かしてやる！！

と、まあこんな子供染みた復讐心から格闘技を始めた訳だが、いざ始めてみるとコレがなかなか面白い。

特に自分が以前より強くなったと実感した時は何とも言えない快感だったりする。

次に二つ目：あれは中学の頃………当時の友人だった近衛素奈緒が同じクラスの不真面目な馬鹿共相手にいざこざを起こし、俺はそれに首を突っ込んで……その結果俺は周囲から「ハッスル君」なんて不名誉な仇名を貰い、逆上した馬鹿共が俺の知らない所で近衛に手を出し、それにブチ切れた俺はそいつ等全員入院する程の大怪我を負わせ、長い事世話になった道場から破門された。

あの馬鹿共をぶちのめした事に全く後悔なんてしていないが一つだけ分かった事があるとすれば、テンションに流されると碌な事にならないって事ぐらいだな。

コレばかりは今でも嫌な思い出だ。

そして最後に、中学卒業を機に足を踏み入れたこの世界……………。

『さあ、本日のメインイベント、ミドル級のタイトルマッチだあ！』

それは……………地下闘技場だ。

『赤コーナー、勝てば新チャンピオン誕生、ココまでなかなかの勢いで勝ち星を稼いできました、美男子ムエタイファイター、半田紗武<sup>むす</sup>巢選手！！』

観客に大袈裟にアピールする半田、見た目通りキザな野郎だ……………。  
「青コーナー、現ミドル級チャンピオンにしてプラスナックルトーナメント優勝経験を持つ若き獅子、対馬レオ選手！！」

「レオーー！！負けんじゃねえぞ！！そんなキザ野郎、速攻でぶっ潰せ！！」

「そうだそうだ！！俺はそういう顔の奴が本気でム力つく！！」  
「そりやお前の私怨だろ」

観戦している幼馴染達の声援と言う名の喚き声に冷静なツツコミを入れる我が親友。

とりあえず声援に応える様に軽く手を振る。

『さあ、いよいよゴングです！！』

司会の声の直後、ゴングによる金属音が鳴り響いた。

「ハッ！セイ！でああっ！！」

ゴングと同時に仕掛けてくる半田。拳とエルボーの連携が俺に襲い掛かる。

『おおつと早くも半田選手得意のコンビネーションだ！！』

「よっ、ほっ、とっ……………」

得意のフットワークで全て回避。うん、大変よく出来ました俺。

「ええい！ちょこまかと！！私の拳で沈みたまえ！！」

業を煮やして突撃戦法に切り替えてきた。だが……………。

「ラァー!!」

カウンター気味に拳を繰り出し、相手の鼻っ柱に叩き込む。

「がつ!?!」

効果あり!半田の奴は鼻血を出して仰け反った。

「おのれえっ!!私的美丽い顔によくも!!!!」

うわ……リアルに聞くと本気でイタイな、その台詞。

「喰らえ!必殺、ジャガーキック!!」

一回点ジャンプしながらの踵落としを繰り出す半田。

「馬鹿が……」

スピードも勢いも今一つ、それじゃ俺には勝てない。

相手の足を受け止め、がら空きになった腹に渾身の力を込めた拳を叩き込む。

「うぐええっ!!」

豪快な音とうなり声とともに半田はマットに沈む。

勝ち星を稼いだ割に大した事無いな、この手の連中はアレだ。新人潰して勝ち上がってきたって奴……たまにいるんだよな。

レフェリーが近づいて様子を見る。普通ならココでカウントを取るんだが……その必要は無いようだ。

「勝者、対馬レオ!」

試合終了を表すゴングが鳴り響き、観客席から歓声が聞こえてくる。

そんな中俺は静かに半田に近づいた。

「次ぎ戦るときはキツチリ腕磨いて来い、新人潰しなんてセコイ真似せずにな」

俺の言葉に半田は力無く頷いた。

「さてと……」

俺は観客からの歓声に応えるように右腕を高々と上空に突き上げた。



## 対馬レオの日常 登校風景

### NO SIDE

対馬レオは健康優良児である。

道場で空手を習っていた頃の習慣で、日頃から筋トレを欠かさず事無く続け、筋力は落ちる事無く維持され、レオの肉体は丈夫そのものである。

それに加え、寝る前は常に20分ほどのストレッチを毎日欠かさずやっているため、睡眠は基本的に熟睡。

故にレオは怪我以外で医者世話になる事はほとんど無い。

しかし、そんな彼も意外と寝起きは普通だったりする。決して遅くも早くも無い。

人間には睡眠欲という三大欲求の一つがあるし、何よりレオは早寝などしない。

そんな彼を目覚めさせる役割を持つのは目覚まし時計、そして……。

「おい、起きろ坊主、起きないなら俺のドギツイのぶち込むぜ」

「ん…… ああ、分かった、起きる」

目をこすりながらレオは起き上がる。

レオを起こしたその赤髪長身の男の名は伊達スバル……レオの幼馴染の一人で親友である。

某自動車修理工のナイスガイみたいな台詞を口に行っているが基本的にノーマルなので前作の凸ハゲと違って安心して友人関係を結べる男である。

「先行ってるぜ、いつも通り力二起こして来い」

「了解」

それだけ言っただけでレオは服を着替え、一度家を出て隣の家に向かう。

「お姉さん、おはようございます」

家の前に居る女性マダムに声を掛ける。

どつからどう見ても『お姉さん』なんて歳じゃないがコレは社交辞令である。コレを言わないと後が怖いのだ。

「レオちゃん、いつもすまないねえ、あんな出洩らしのためにいつもいつも……よかつたら嫁にもらつてくれない、アレ？」

「俺にいきなり『舞空術を教えてくれ』なんて言う娘はちょっと……」

「そつよねえ、私が男でも絶対嫌だもん」

そんないつも通りの会話をしてレオは2階へ上がる。

扉を開けるとベッドに寝そべる少女が目映る。

典型的な幼児体型、栗色のショートヘア、恥も外聞もなく丸見えのパンツ。

コイツが出洩らしこと蟹沢きぬ、通称力二である。

蟹沢家の長女であり優秀な兄と違いどうにも頭の出来がイマイチで両親から出洩らし扱いされ、ほとんど放任されている（といっても別に家族仲が険悪という訳では無い）。

ちなみに彼女は自分の下の名前がお気に召さないらしく、下の名前と呼ばれるとキレて暴れまくるので取り扱いには要注意である。

「zzzz……」

「おゝいきろ出洩らし、いつまで馬鹿面晒してる気だ？」

「……やっぱ……ボクって可愛いよねー」

実に器用な寝言。レオは時々彼女の馬鹿さはある意味凄いと思っ  
てしまう。

取り敢えずそろそろ起こさないと自分まで遅刻してしまうのでさっ  
さと起こす事にする。

いつも通り力二の頭を掴んで軽く少しずつ力を加えていく。レオの  
得意技の一つ、アイアンクローである。

「いででででででで……！！！！」

「よう、起きたか」

丁度力二の意識がハッキリし始めたところで手を離す。

「んー、おはよう……」

先程の痛みも忘れて再び寝ぼけ眼になるカニ。鈍いと言うか図太いと言うか……………。

「じゃあ、20分後、二度寝したら置いてくからな」

「んー、分かった……………」

多分分かっていない……………。

しかしレオはそんな事気にしない、何故なら泣きを見るのはカニであつて自分じゃないのだから。

その後、スバルがおせつかいで用意してくれた朝食を食べて支度を済ませて家を出る。

カニは来て……………ない。どの道予想していた事である。

これによつて至る結果↓レオはカニを置いていく。

一見冷たい選択に見えるがレオはそんな事気にしない、何故なら泣きを見るのはカニであつて自分じゃないのだから。

大事な事なので2回言いました。

レオSIDE

やはり朝のこの時間は通学路であるドブ坂通りは非常に静かだ。どの店もまだ開店前なので仕方ないと言えば仕方ないが……………。

「ちよつと待てやあああ—————!!!!!!」

静けさをぶつ壊すチビが一人、カニだ。

「おお、やつと来たか？」

「来たか？じゃねえよ!!!ボクを忘れんじゃねえよ!!!余りにも大事な存在だろうが!!!」

「お前か遅刻しないかで言えば俺は遅刻しない方を取るんな」  
「そこはボクを選べ!!」  
無茶言っな。

## NO SIDE

5分後

「よお、レオ」

ジューズを買いに行った力ニを待っていると現れた猿面の眼鏡男、  
さめすがしんいち  
鮫氷真一。

格好良いのは苗字だけ、他は全く駄目。

彼の事を説明する言葉があるとすれば

『ヘタレ』

これ以外に無いだろう。

「何か今遙か天空の誰かに悪口言われた気分なんですけど」

「気にするな(いつもの事だろ)」

「そんな事よりさあ、聞いてくれよ俺昨日ケイコちゃんとデートの  
約束を……」

→言っておくがコレはギャルゲーの話である。

「オメエのギャルゲー談義なんて聞きたかねえよ」

いつの間にか戻ってきた力ニが盛大な毒舌を炸裂させる。

「うつせえよチビ! お前にケイコちゃんの良さが分かってたまるか  
!!!」

実に下らない事で言い争う二人。

レオSIDE

「ん？」

騒ぐ二人の馬鹿を無視して先に進もうとした時、俺の六感がこっちに迫ってくる殺気を拾い取った。

「っー!!」

乗っていたMTBを飛び立つように乗り捨て、背後から鋭い蹴撃が繰り出される。

「っ……………」

即座に反応し、ブリッジのように体を反らして回避。

「チッ！」

襲撃者は一瞬舌打ちして肘鉄を繰り出してくるが……………。

「フンッ！」

「グ……………！やるわね……………」

腕を付かんで捻り上げ、関節を極める。

「相変わらず朝っぱらから随分な挨拶だね、姫」

「あら、コレくらい対馬君には挨拶代わりでしょ？」

襲撃者の名は霧夜<sup>きじや</sup>エリカ、通称『姫』。

俺の通う学園、竜鳴館の生徒会長にして世界に名立たる霧夜グループの令嬢。

頭脳明晰、運動神経抜群、容姿端麗にして高いカリスマ性を持ち、人の上に立つ器を持った女だ。

ただしその性格は傲岸不遜で傍若無人。味方も多けりや敵も多く、竜鳴館には親姫派と反姫派の二大勢力があるほどだ。

故にその姫と言うあだ名は尊敬と皮肉両方の意味がある。

彼女とは半年程前からこんな風に物騒な挨拶を交わす様になったのだがその説明はまた別の機会に……………。

んで、そんなこんなでようやく校門にたどり着いたわけだが。

「……………」

何故か日本刀<sup>ボン</sup>を持っている風紀委員の前を通り登校。

しかし、最近妙にあの風紀委員から視線を感じるんだよな。

どっかで見たことあるような気がするけど……………誰だっけ？

おまけ フカヒレ、男の涙

カニとの下らない言い争いを終えたフカヒレはレオとエリカの（自称）スキンシップをじつと見つめていた。

「畜生、レオの野郎……………あんなに姫に障りやがって……………悔しくなんかないぞ」

「本心は？」

「悔しいです！！」

## 対馬レオの日常 学園生活（前書き）

どーも、神無鴉人です。

ここ数日の間学校のパソコンが使えず、ストック作成に励んでいました。

おかげでストックが結構溜まり、暫くは連日投稿で行きます。

## 対馬レオの日常 学園生活

### レオSIDE

現在竜鳴館は朝礼中、姫の演説が終わり、艦長のありがたいお言葉の時間に入る。ココで生徒達は全員緊張した面持ちになる。

今この場で居眠りでもしている奴がいるとすれば、脳に異常があるか自殺志願者のどちらかだ。

「男子は男気を！女子は女気を！磨き、青春を謳歌せよ！竜鳴館館長、橘 平 蔵！」

マイクも使わずに響く馬鹿でかい声、その声の主こそ竜鳴館館長、たちはなへいぞう橘平蔵だ。

185cmという長身と丸太のようにでかくがっしりとした筋肉、右目と鼻の頭に刻みついた傷跡と長い髭を蓄えたその顔、全身から出る威圧感、まさしく豪傑そのものだ。

俺の目標としている人物でもある。いまだ独身という点を除いて……。

「ふわあ〜……」

長つたらしい朝礼が終わり教室に戻りながら欠伸を掻く。

「でつかいあくびねー、みっともない」

「ん？姫か……」

「そんなテンション低い人は見ててうざったいから消えて欲しいかなー」

声をかけて早々これだ……いつもの事だけど。

「はい、薔薇をあげる、香気で目を覚ましなさい」

何処からともなく薔薇を取り出し俺に投げ渡す、いつも思うが本

当に何処から出してんだこの薔薇。

「相変わらず妙な特技をお持ちのようで」

「お嬢の嗜みよ、ポーズをとったら薔薇ぐらい出せなきゃ」

解らんなあ……。ま、俺には無縁の話だからどうでもいいけど。

「じゃ、こっちはチャンプの嗜みだ」

貰った薔薇を軽く指で弾く。直後に薔薇は四散し、文字通りバラバラになり、そのまま風に乗って窓の外に飛んでいく。

「わお、薔薇がバラバラって奴？綺麗だけどネタは古いわね」

古い言っつな、薔薇しか材料が無いんだから仕方ないだろ。

## NOSIDE

本日は学生達（一部除く）にとって憂鬱な日である。

『中間テストの結果』という鋭利な刃物で精神を抉られ、クラス中が阿鼻叫喚の図に早変わりである。

さて、我らが主人公レオの結果はというと……。

古典 まあまあ

現国 無難

歴史 それなり

（我ながら何て無難な出来なんだ）

例えるなら特徴が無いのが特徴、学業のジムカスタム、それがレオである

「フカヒレ、歴史で勝負だもんね」

「せめてフカヒレには負けねえべ」

「負けたら人間として終いやからなあ」

そして今この時だけはフカヒレは人気者になる。

馬鹿の代名詞カニ。

授業中は消しゴムのカスを集めている田舎の匂いが染み付いた立ち絵つきの脇役イガグリ（本名？知らん）

カニに劣らず成績低空飛行者、褐色関西弁娘、浦賀真名。うらがまな

その他大勢の成績の低い者達こそが拳こそつてフカヒレに非常に低レベルな戦いを挑むのである。

それに引き換え……

「エリー、また満点？勝てないなあ」

「当然でしょ、何？よつぴーは1問間違え？」

姫こと霧夜エリカとその親友にして2「Cの委員長、佐藤良美。さとうりょうみ

こっちは余りにもハイレベルすぎる。

（この落差は何？）

レオはそんな事を呟いた。

レオSIDE

結果発表と言う名の地獄の後、昼休みに入りフカヒレをパシってパンを買いに行かせて昼飯を済ませ（ちなみに、カニの奴は先程低レベルな戦いを共に戦った戦友の浦賀さんと浦賀さんの親友で留学生の楊豆花さんヤントシンファと一緒に食った）、その後残りの授業をクリアしようやく帰りのHRになる。

しかし……担任教師がまだ来ない。

「祈ちゃん、まだ来ないのかなあ……」

「来るの遅いよな、大方また職員室でくつちゃべってるんだろっけ

ど、現実の女はこういう所がイヤだよな」

「その発言、フカヒレは人生終わってるね」

「よつぴー、帰っていい？」

「よつぴー言わないでよう」

佐藤さんは基本的に姫以外によつぴーと呼ばれるのは否定的だけど、もうその呼び名が定着しているのでクラスメート殆どはおるか担任にすらよつぴーと呼ばれてしまっている。

ま、そこら辺はもう諦めるしかない。

んで結局イガグリの奴が姫に先制を呼びに行かされ、数分かけてようやく担任が姿を現す。

「皆さん申し訳ございません、遅れてしまいましたわ」

絶対申し訳ないなんて思ってた無い……………。

高校教師、おおえやまいのり大江山祈。

俺達の担任で担当は英語。美人で居乳ということで男子生徒の人気は抜群。媚びた態度を取らず飄々としているので女子生徒からの人気もある。

大江山と言う苗字は地名で紛らわしいので皆は祈先生と呼んでいる。ただし教育方針はスパルタである。

「祈センセ、何してたのさ？」

「職員室でお茶をしましたらいつの間にかこのような時間でしたの」

「ま、お前たち若造は忍耐ってモンをしたねえからな、たまには待ってみる、と言うのもいい経験だろう、コレも教育の一環だよ」

祈先生の肩に止まるオウムが饒舌に喋る。

この鳥公の名前は『土永さん』、祈先生のペットだ。

普段は空に居るがたまにああして一緒に行動している。

ちなみに声質はかなり渋く、古臭い知識で説教するのが得意技だ。

「それでは早速HRを始めますわ、プリントを配りますので回してくださいな」

……進路希望調査か。

「いいか、お前たちはとくに義務教育終わってんだ、進学しない者はもうすぐ世間の荒波に揉まれて生きていかなきゃいけねえ、た

まにはそのとろろみてえな脳ミソ真面目に使って、自分の将来について考えてみる、分かったな？ジャリ坊どもが」  
「……と、土永さんが言ってますわ」  
相変わらず鳥の癖に痛い所突いてきやがるぜ。

## 放課後

「どっかで遊んで帰ろーっ」

カニがピョンピョン飛び跳ねる。元気が有り余ってるな。

「帰宅部の活動開始と行きますか」

フカヒレよ、帰宅部に活動なんてあるのか？

「んじゃ、オレは陸上部行くとすっか」

「がんばれよアスリート」

スバルは陸上部期待のホープである。

「……テメエらも部活がんばれよ」

「おうよ。全身全霊をかけて帰宅してやんよ」

「帰宅部には帰宅部で辛いところあるんだぜ？ 陸上部の連中には

わからねえだろうがな」

「はっ、そりゃあわかりたくもないがよ、一応聞いてやるよ。なんの苦労があんだ？」

「あるね。陸上部や空手部……部活の連中が一生懸命やってる中、俺たちは悠々と帰宅、そして家に帰ってふと、ある考えがよぎる……俺はこのままでいいのか？ 青春をダラダラ無駄にしていないか？ いや、まだ本気出していないだけ。俺はやればできる子って言われてるんだからな」

……

「うーん、でも真面目に自分の将来を考えるとハッキリ言ってる怖いぞ。とりあえず、ゲームでもして気を紛らわせよう！……って、こ

んな自分に気づかないフリ……で、ごくまれに自己嫌悪するわけよ。苦勞というより苦悩ね」

そりゃ苦悩じゃなくて単なる逃避だ。しかもニート思考の。

「……ああ、そりゃあツレーな。せいぜい悩んでくれよ。じゃあな」スバルは呆れ顔で踵を返した。

フカヒレを表す言葉がもう一つあった、それは『ダメ人間』だ。

「あれ？ 俺の意見ダメだった？」

「ダメ人間の国家代表だなお前は」

いや、本当マジで。

「伊達君、再見」  
ツアイツェン

「伊達君、部活頑張つてやー」

「はいはい」

浦賀さんと豆花さんを始めとした女子がスバルに声を掛けていく。スバルはイケメンだから基本的に女子の人気は高いのだ。男子からは怖がら（疎ま）れているが……。

「くそつ、スバルの野郎、男子からは怖がられているクセに、女子の人气が高いんだよなあ、アウトロー気取っちまってさあ」

もてない男の僻みはみつともないぞ、フカヒレよ……。

「あ、ひとつ断っておくけど、うらやましくなんかねえよ？ 本当だよ？」

「実はうらやましいんだろ」

フカヒレはコクリとうなずいた。素直な奴だ。

「まあ、スバルは顔がいいからね。クラスNo.1」

「結局顔なんだよなあ。でも俺だって悪くないと思わない？ 眼鏡っ漢だしさ」

お前はその眼鏡がマイナス要素になってるのに何故気付かない？ いや、つけようがつけまいが変わらんけど。

「フカヒレは遠回りに言くと、ブサイクのカテゴリーに入ると思うよ」

「……それ近道で言つとどうなるんすか？」

「言って欲しいんなら言うけど、遠慮なく」

やめとけ、お前が遠慮無しに言ったらフカヒレは死ぬ。

「あ、やっぱやめて下さい、勘弁してください」

「まあ、黙ってればそれほどでもないんだけどしゃべるとダメオーラを発散するんだよねえ君は」

「いいんだ、俺には二次元があるもん、結構いいもんだぜ」

「はい、この時点で負け決定」

「言ってる傍からコレですよこのダメ人間は……」

俺とカニの容赦ない毒舌にフカヒレはort状態になったのであった。

靴箱のある玄関に到着したところで、フカヒレが突然キョロキョロとしきりに辺りを見回し始めた。

「何、ついに妖精見えちゃったん？ レオと一緒に病院行くか？」

「いや、何か視線感じない？」

視線？ そう言われてみれば、確かに後ろの方から感じないことも無い、ただこれは妙な気配だ、敵意も熱意も無い無機質な気配。とりあず無視して様子を見るか。

「そうかな？ どうも誰かが俺を見ている気がするんですが」

「誰もフカヒレなんか見ないよ、時間の無駄じゃん」

「ばっさり切り捨ててカニは靴箱の小扉を開けた。」

「いや、この鋭い視線……確かに感じる……」

コイツの察知能力は時々俺より高くなってしまっから怖い。

「少なくともお前に思慕の情を抱いているようなものじゃないから気にするな」

「新一です、親友にまた馬鹿にされたとです……」

再び落ち込みだすフカヒレ。喜怒哀楽の激しい男である。



対馬レオの日常 学園生活（後書き）

次回の更新は明日7時です。

## 対馬レオの日常 夜&二日目

### レオSIDE

俺達の生まれ育ったこの街、『松笠』。

名前の由来はこの地に固定保存されている連合艦隊の旗艦名から。人口は約45万人。東京湾入口、関東の南東部に位置する、産業、港湾、観光の都市である。

米海軍・自衛隊の基地が点在し、異国情緒溢れる街として広く全国に知られている。

街には外国人や観光客、若者が多いため、ゲーセン、カラオケ、ビリヤード、ダーツ、ボウリング、クラブ、その他諸々、興施設には事欠かない。一種の歓楽街である。

都心まで一時間足らず、比較のおしゃれなイメージで尚且つ自然が多い。非常に魅力的な街だ。

あの後ゲーセンで遊んだ俺達は家の近くで一旦別れた。

「お帰りなさい、あなた」

「ああ、ただいま」

家に入るとスバルが飯を作りながら待っていた。

いつておくが別に怪しい関係とかじゃない。

俺は料理できないというほどではないが別に得意って訳でもない。

せいぜい肉と野菜炒めたり玉子焼きを作ったり出来るぐらいだ。

逆にスバルは不良っぽい外見に似合わず家事万能。作る料理は目茶苦茶美味い。

スバルの家は対馬家の三つ隣。

スバルの父親は将来を嘱望されていた陸上選手だったのだが、事故だかケガだかで挫折、後は酒びたりの女びたり。

結果母親は家を出てスバルも父親がいる家には帰りたくないらしく、父親と同じ空気を吸うのも苦痛と本人は語っている。

そんな事情で俺の家で飯を造って一緒に食うわけである。

大体週3〜4日くらい。俺は資金と場所を提供し、スバルは食材と技術を持ち寄る。

わかりやすいギブアンドテイクな関係だ。

「今日は野菜もこんもり入った牛カルビと、ネギの味噌汁、きくらげとフキのごまネーズだ」

「最高だぜ、何でお前女に生まれなかった？」

「フカヒレみたいな発言すんなよ」

地味に傷つくぞその言葉……。

その後力二とフカヒレも家に来て暫く駄弁り、9時を回った頃で家を出る支度を開始した。

「あ、そういえば今日だよ、防衛戦」

「ああ、骨のある奴だと良いんだけど」

これから行く所は俺のバイト先、地下闘技場だ。

地下闘技場……とだけ聞くと聞こえが悪いが、正確には違つ。

地下にあるバー『クレイジードッグ狂犬』、そこで行われる格闘ショーだ。

ショーといっても勝負自体は真剣勝負そのもの、ファイトマネーだつて出る。

賭博もやって無いから合法だし、ルールもプロの総合格闘技と同じだ。分かりやすく言えばハイレベルなアマチュア格闘技つて所だ。

客もかなり多く、遠くから来る人間も居るほどだ。松笠の隠れた名所である。

ただしファイターの实力もピンからキリ、俺の实力は闘技場に登録しているファイターの中でもトップクラスでミドル級チャンピオンなため、互角に戦える人間は少ない。

チャンピオンクラスの实力者であれば俺と互角以上の奴はいるんだが、如何せんそんな実力者はなかなかいない。それに他のクラスのファイターとは早々戦えないし、最近はずまらない防衛戦ばかりだ。

「今回の対戦相手だけど、半田紗武巢とかいうキザ野郎だぜ、新人潰して好い気になってるって噂だ」

何処で仕入れたのかフカヒレが対戦相手の情報を教えてくる。

新人潰しか……………あんまり期待できないな。

『さあ、本日のメインイベント、ミドル級のタイトルマッチだあ！』

で、試合になった訳だが……………試合内容に関しては割愛させてもらう。

プロローグで語ったし……………。

## NO SIDE

現在時刻午後一時ジャスト。

夜の松笠にたたずむ一人の女。

長身で鋭い目つきだが整った顔つきに抜群のプロポーション。

「ねえ、ちよつといいかな？」

その美貌に釣られて男が声をかけてくる。何処からどう見てもナンパだ。

「消えろ…………潰すぞ」

「う」

目で威嚇して追い返す。たいていの人間はコレで尻尾を巻いて逃げる。

（小物が）

「……つまらないな」

誰にも聞こえないような小さな声で彼女、椰子<sup>やし</sup>なごみは呟いた。

そして一日が終わる。

## レオSIDE

校門が閉まる直前、あわただしくかける人影が二人、俺とカニだ。  
「ったく、また遅刻ギリギリだ、懲りもせず朝デッドなんかしやが  
ってこのチビは」

「うつせー！デッドを聴いて一日が始まり、デッドを聴いて一日が  
終わる、これがボクのライフスタイルだもんね！っーか誰がチビじ  
や！？」

こんな感じで今日もまた遅刻ギリギリで登校。どうにかならんのかね、カニの朝デッドは……………。

本日はテストの成績順位の発表日。全員廊下に張り出される結果に釘付けになる。

1位 霧夜エリカ 800点

オール満点である、さすが姫。

「やっぱ姫って頭いいよね……」

「ああ……………」

俺もカニも感嘆の声を上げる。

ちなみに俺の順位は丁度真ん中辺り。カニは…………聞くな。

一時間目は英語。祈先生の担当教科だ。

普段はおちゃらけな祈先生だが授業は厳しく、スパルタなので私語も居眠りも厳禁だ。

「フカヒレさん、のんびりしてますわね、このままですと、二年生をもう一回、ですわ」

男子から先に呼ばれて、答案と一緒に祈先生の一言をもらっ

「伊達さん、貴方ならもつと出来るはずです、期待していますわ」それは賞賛、慰労、叱責、脅迫、激励と実に様々。

「対馬さん……点数はまあまあですがあまりに特徴がなくてつまらないですわ、もう少し正解か間違いを増やしてください」

俺は訳のわからん言葉だった。

「続きまして女子、浦賀さん、まだまだですわ」  
無表情。

「カニさん、期末には一寸の虫にも五分の魂を、期待してますわ」  
呆れ顔。

「霧夜さん。言うことなしです。相変わらず素晴らしいですわ」  
笑顔。祈先生は表情をコロコロ変えて答案を返していく。

「よっぴー、ひっかけ問題にひっかかってくださってありがとう。点数自体は素晴らしいですわ」

「先生までよっぴー言わないでくださいよう……」  
諦めよう佐藤さん、もうそれが定着してるんだ。

「祈先生って人によってコメント露骨に違うね……」  
確かに……丁寧な言葉遣いなのだが、言っていることがか

なりシビアである。

「くそっ、またフカヒレの点数見て心の傷を癒すぜ」

「フカヒレ君は何点だったのかなあ、彼には負けたくないなあ」

点数の低い連中の声が聞こえてくる。フカヒレよ、お前は本当にこういうときだけは人気者だなあ。

「なお、通常は30点以下なら赤点追試ですが、英語のみ、50点以下の場合から追加プリントをやっていたいただきます」

「えええーっ」

「その課題をやってこなかった方は……残念ながら“島流し”にしますわ」

良かった、俺68点で……………。

そして昼飯、本日は毎週恒例の学食30円引きの日だ。

「先行くぜ、よつとお！」

スバルが先行して2階の窓から飛び降りる。

「じゃ、俺も先行くわ、じゃあな臆病者<sup>フカヒレ</sup>」

「あばよ臆病者<sup>チキン</sup>」

俺とカニも飛び降りる。

普通に危ないが俺とスバルは運動神経が高いし、カニは体が軽いから全く問題ない。

フカヒレだけは無理。

「ちつくしよう、俺を仲間はずれにしやがって!!」

そんな声が聞こえたような聞こえなかったような……………。

大学食は竜鳴館の名物の一つだ。

野外には海も見えるテラスがあり、そこで食う飯は格別だ。

「それにしても、島流しか……流されるのは欲望だけで充分だよな」  
水平線の先に見える小さな島、竜鳴館所有の無人島、『<sup>いかしま</sup>鳥賊島』

だ。

祈先生が言っていたように成績不良者や素行不良者は、あの島に流される。

そこで性根を鍛え直されるのが、通称『島流し』。大学食と並ぶ竜鳴館の名物である。

以前典型的なツツパリヤンキーが、島流しにされ、戻ってきた時には聞き分けの良い子に変わり果ててしまったという話だ。

こんな破天荒な学園なのにド派手な不良がいないのは、こういうのが抑止力になっているのが大きい。

「じゃ、俺集会あるから」

フカヒレがそう言って席を立つ。

集会とは霧夜エリカファンクラブの集会である。フカヒレはその広報部隊所属。

親でも反でもない俺から見ればよく分からない集会だ。

「あ、そうだレオ、お前も来てくれ、出頭命令が出てるんだ」

は？

「何で？」

「ほら、お前姫と割と仲良いじゃん、お前と姫の関係について確認したいって皆が言ってるさあ」

面倒くせえ……。でも変な噂立つのも嫌だし、仕方ない行くか。

「まずは広報部隊、研修〜今日までの姫の様子を報告してください」  
「うす、相変わらずテストはオール100点、2位に影も踏ませずぶっちぎりトップです」

親衛隊長の言葉にフカヒレが答える。

「また、のどが渴いたといってそこら辺の男をパシリに使ったり…

「……………」

「……………」よくもまあ一つの話題でココまで騒げるなあ。

まあ当然と言えば当然か、姫にはそれだけのカリスマ性と実力があるし、かく言う俺もあそこまで自分を貫ける彼女を結構尊敬しているからな。

「で、そろそろ本題に移るけど、対馬君」

「あ、はい？」

「君は姫とはどういう関係なんだ？」

姫との関係……………」。

「悪友かな？姫の事尊敬はしてるけど別に恋愛感情は持って無いし」

「本当か？二言は無いな」

俺の言葉に細めにオールバックの男が訝しげに訊ねてくる。確かこいつは2 - Aの……………」。

「ああ、少なくとも今の俺にそういう感情は無い、安心しろ村越」

「村田だよ！村田洋平むらたようへい！！村越って誰だ！？」

ああ、そうそうコイツ村田だ。

ついでにその後ろに居る女子は写真係で村田と同じクラスの西崎紀にしざきの子りこだっけ。

「おいおい、お前村田知らないの？2 - Aの秀才で地獄育ちの男で有名じゃん」

フカヒレが背後から小声で話しかけてきた。

「地獄って何が？」

「村田洋平には12人の妹がいてアイツに懐いているらしい」

「それ天国じゃないのか？」

「ただ、全員すんごくブスなんだ」

「地獄だ！！」

何て意味の無い設定なんだ……………」村田洋平恐るべし。

「で、写真係の可愛い女の子が西崎紀子、2 - Aのマスコットみたいな娘で写真が趣味で広報委員会所属」

「やけに詳しいな」

「村田とは1年の時同じクラスだったし西崎さんは可愛い系として名を馳せている、つまり2人とも2-Aの有名な人なんだよ、お前がそついうの無頓着なんだ」

「ふーん……ま、別にいいけど」

どーでも。

んで、ようやく長い集会が終わり俺も解放される。

「あ、やっぱりココにいたわね」

「なんだ近衛、お前アンチ姫じゃなかったか？」

げ……嫌なのが来た。赤髪ツインテールでいかにも強気って感じの顔、俺の最も忌まわしい記憶の当事者の一人、近衛素奈緒<sup>このえすなお</sup>だ。

近衛のほうも俺と喋る気は無いらしく俺と目が合っても一睨みしてきただけで終わったが……

「おいフカヒレ、いい加減レオ返せ〜」

うわ、カニの奴なんてタイミングの悪い。

「ん？げ、何でツインテールがココに居んだよ？」

詳しい説明は省くが、カニと近衛は目茶苦茶仲が悪い。その近衛がココに居るのに気付いてカニは一気に不機嫌になる。

「何よ、私だつて来たくて来てるわけじゃないわよ、第一いきなり突っかかってくるってどういいうつもり？」

近衛の奴もますます不機嫌に……。

「ハ！自分の胸にでも聞けよ赤毛猿、来たくないなら来んじゃねえよ」

「何ですってえー!!」

あーあ………やっぱりこうなるか。

「アンタ本当にトサカに来る!!」

「けっ！ボクはお前の存在自体が気に入らないんだよ!!お前の所為でレオはなあ……」

「カニ!!」

「……ッ！ご、ゴメン」

俺の怒声にカニは口を滑らせかけた事に気付き、引き下がる。

「戻るぞ」

「う、うん………悪い、レオ」

「いいんだよ、次から気をつける」

軽くポンポンとカニの頭を撫でるように叩き、俺達は屋上を後にした。

対馬レオの日常 夜&二日目（後書き）

次話は今夜0時に投稿予定です。

## オアシスでの出来事 辛口キング（クイーン）登場！！

レオSIDE

放課後、今日は英語の補修があつたので遅くなり、空はもう夕方になっていた。

その後スバルとフカヒレの二人と合流し、カニのバイト先であるカレー専門店『オアシス』で晩飯という事になった。

「いらっしやいませーっ……っ、何だフカヒレ達か」

この松笠市の名物はカレー。

キャッチフレーズは『カレーの街、松笠』。

町中にはカレー屋が数多く点在しこの『オアシス』も例外ではない。

「ご注文はお決まりですか？『可愛いウェイトレスの気まぐれオススメコース』なんていかがでしょうか？」

「そのコースは福神漬け大盛りとか来るからイヤだね、ビーフカレー甘口」

「チキンカレー辛口、ライス大盛り」

「ポークカレー辛口、ルー多めで」

「ノリの悪い……日本人はこれだから、ちょっとはインド人のテンチョーを見習えってんだ」

「H A H A H A」

落書きみたいな顔をしたターバン男（店長）がカレー作りながら笑う。

あれ本当にインド人か？

「店長の名前はアレックスって言っただ」

絶対インド人じゃない……いやいや、そんなのどうでもいい、要はココのカレーが美味いか否かだ。

カレー好きのカニがまかない目的でバイトに入っただけあつてこの店のカレーはかなり美味い。まあ、じっくり味わおう……。

「いらつしゃいませーっ」

来客を知らせる鐘に素早く反応したカニが、突然硬直した。

「……」

シャギーのかかった長い黒髪、鋭い切れ長の瞳に背丈は170センチを超えているだろう。

細身のジーンズに赤いスカジャンという格好は、活動的というより攻撃的に映るが、それを差し引いてもかなりの美人だ。

「おっ、美人」

それも顔にうるさいフカヒレが認めるほどの美人だ。

「ぬおおおおお——！ 来たーっ！ テンチョー！ 辛口キングだ！」

おい、女にキングは無いだろ……。

「OH！落ち着きマシヨウ、カニさん、まずはオーダー、デース」  
「……ご注文は？」

「超辛スペシャルカレー、チャレンジ」  
キングはクールに答えた。

「超辛スペシャルカレー入りましたー！」

あ、アレをか？

「超辛スペシャル……おお、完食すればタダ。何度でもチャレンジ可能ってコレか」

「以前俺、あれにチャレンジして一口でダウンしたんだけど……変な汗出たよ」

超辛スペシャルカレー。俺も挑戦した事はあるが……。

一般人なら一口で炎上、三口で発狂、そこから先は地獄で、次の日もトイレで地獄。

俺でさえ七口が限界だったんだぞ！！

「シイイイト！ おそらくまた食べられてしまいマース、ここは白旗あげまシヨウ！」

「くっ……それしかねーのか……。だから何度でもチャレンジ可能は無限コンボ喰らうからやめようって言ったのに」

早くも諦めモード、あの女マジで完食したのか？

(ニヤリ)

あ、笑った……………どう見ても嘲笑だが。

「笑いやがったなあのアマあ！ちよつと胸がデカそうだからっていい気になりやがって！構わないやテンチョー、完食されたらボクの給料から差っ引いていいから、勝負を受けよう！」

さすがカニ、勝算が無くても諦めない蛮勇の持ち主だ。

「そこまで言い切るならいいデスけどー。すでに一回完食されてるのに勝算とかソウイウノあるんデスかー？」

「なあに、香辛料を限界まで入れれば大丈夫、火い吹くから」

「ソレ、普通に致死量デスよー」

「構わないっしょ、別に」

鬼だ、カニの皮被った鬼がココに居るよ…………

「味を落とさずに、コレ以上辛くするの大変なんデスけどねー、わかりましター」

いや、止めるよ店長…………。

「ってわけで、超辛カレーお待たせしましたー」

王の卓に置かれたのは、赤味の強いカレー……………ブクブクと気泡が上がって、ありや最早カレーじゃねえよ。

「いただきます」

一切の動揺も無く、キングは超辛カレーを食べ始めた。

(もぐもぐ)

一口、二口…………ぜ、全然ダメージを受けてない……………。

「やっぱりおいしい」

そしてこの台詞である。

「おいおい、平然と食ってるぞ、何者だありやあ」

「味覚、絶対ぶっ壊れてるぞ……………」

俺もスバルもあいた口が塞がらなかった。

俺でさえ七口で敗北したあのカレーをああも簡単に……………くそう、プライドが傷つくぜ。何のプライドかは知らないが

「よっしゃ、今こそ俺がやりたかったことを実行してやる。おい、バカ面してるウェイトレス！」

「……………フカヒレの奴何する気だ？」

「んだよ、ダメ人間」

「あの美人に、セイロンティーを」

「その出来の悪い脳みそでも、“あちらのお客様からです”って言うのだけは忘れるなよ！」

「いいよ、セイロンティーね」

ニヤリと笑ってカニが準備に取り掛かる。またよからぬことを考えて……………

「サービスのホット・セイロンティーですう！ちなみに、あちらの眼鏡をかけたお客様からです」

ほらやっぱり……………あの超辛にホット・セイロンティーって……………死にかねんぞ。

「ばっ……………辛いもん食ってんだから普通アイスだろ、なんで湯気出てんだよ」

「ン……………グツグツしていい、カレーに良く合う」

カニの期待は大いに裏切られ、キングは悠々とセイロンティーを飲み干す。

「そんな馬鹿な……………。喉を火傷させて殺すつもりで熱したのに」

「おいしかった。全部食べたから無料ね」

「恐ろしい女だ……………」

「ウアアウ……………その通りデース。ありがとうございましたーっ！」

「セイロンティーごちそうさま」

帰り際にそう言った。ただしぶっきらぼうにであるが。

「あっ、いえいえどういたしまして……………へへへ、あのコと会話しちゃったよ」

あの程度で喜ぶか、コイツはコイツで別の意味で凄い。

「くうっ……………負けた……………、完食された……………」

結局、カニはバイト代から超辛カレーの代金を差っ引かれたので

あ  
っ  
た。

**オアシスでの出来事 辛口キング（クイーン）登場！！（後書き）**

次の投稿は本日の正午です。

## 再会 鉄の風紀委員、鉄乙女！！

レオSIDE

走る、疾走する。

本気を出せばもつと凄い速さを出せるが、如何せん力二をつれている以上見捨てるわけにはいかない……………いや、見捨てても良いんだけどそれだと後が厄介になる。

え？何故俺がこんなに急いでいるかって？

決まっている、寝坊して遅刻寸前だからだよぉ！！

俺と力二だけじゃない、スバルとフカヒレもだ（結局いつものメンバー）。

そして……………。

「無情だ……………」

「くう……………見事に校門閉まってるじゃん、こうなると遅刻届貰うしかないんだよね？」

「いや、俺は納得しないぞ、折角頑張って走ったのに、こうなったらフォーメーションで裏側から入ろう！」

よし、久しぶりにやるか。

校舎の裏側に回り込み外壁の前に立つ。並の人間ならこの高い壁を飛び越えるのは無理。だが俺達は4人で連携すれば簡単だ。

まず俺とスバルをジャンプ台に力二とフカヒレが壁を上る。

続いてスバルが俺をジャンプ台に壁を上り、最後に俺が単独で壁を飛び越える。

コレでも俺は日払いのバイトで軽業をやっていたりするので某名無しの少年並に身軽なのだ。

何はともあれコレで全員潜入成功。後はこのまま何食わぬ顔で校舎に入れば万事解決だ。

「そこの4人、ちよつと待て」

後ろから凜とした声が聞こえた。

だがまだ後ろは振り向かない。顔を見られるわけにはいかない。

「どうするよ？」

「当然、逃げるー!!」

一斉に逃げ出す俺達4人、しかし……。

「止まれ、止まらないと制裁を加える」

「おい、何か言ってるぞ」

「止まれって言われて止まる馬鹿はいねえよ」

「俺も逃げ足だけなら自信があるぜ」

こいつらは頼もしい事を言ってくれているが……何だ？妙な不安が……。

「警告に従う気は無いと判断した……実力行使だ」

！？まずい、あの女!!

「止まれ、皆！逃げても無駄だ!!」

「ふむ……賢明な判断だ」

一瞬女の殺気が薄れた。

「何言ってるんだよ！諦めたらそこで試合終了だろうが!!」

「俺は逃げ切るぞ!!たとえ友を見放しても!!」

カニはいつも通りとして、フカヒレお前は最低だ。

「坊主が血相変えて止めてんだぜ、止めた方がいいんじゃない？」

さすがスバルよく分かってらっしゃる。

「ぶげらっ!？」

「うぎゃ!」

もう遅いけど……。しかしこの女、どこかで……。

「一撃で終わりか……」

アレは、たしか……ガキの頃。

「根性無しが」

!!

お、思い出した。アイツは、あの人は……

「くちごたえするなコンジョーナシ！くやしかったらわたしにかつてみる！」

「お、乙女さん？」

「ん？レオ、お前ようやく思い出したのか？」

「やっぱりだ……。」

「知り合いか？」

「従姉だよ……。」

「は？それって前に言っていたあの……。」

「ああ、あの鉄乙女さんだ」  
くろがねおとめ

俺の運命を変えた張本人だ。

で、説教タイム突入と相成った。

「本来、こういうものは同じ学年の風紀委員が注意するのが筋なのだがな、あいつはもう、自分では抑えられないと言っている」

クソ、2年の風紀委員（名前知らない）め、アイツの方がよっぽど根性無しだ。

「なんだよ！じゃあ俺が感じてた視線ってこの女だったのか！」

「この女、だと？」

「ひっ、ひいひいひいっー！？」

いかん、フカヒレのアホがトラウマ発動してやがる。

フカヒレこと鮫氷新一には姉が一人いる。彼女はとても美人だが、筋金入りのドSであった。

フカヒレのトラウマは相当重く、下手にトラウマが蘇ると恥も外聞も気にせず泣き叫んでしまうほどに……。

ちなみに、現在フカヒレの姉は家を出ており、東京で働いている。

「お前たちは特に違反が多い。とりあえず今週見た限りでは、屋上への侵入、廊下の爆走、図書館での飲食、下校時間の超過、漫画持

ち込み……だな」

「畜生……偉そうに説教しやがって……」

「止めとけ、相手が悪すぎる……闘技場で言えばチャンピオンクラスだぜこの人」

小声で恨み言を呟くカニを諷める。

「うう……」

悔しそうに唸るカニ。普段なら絶対噛み付いているだろうがチャンピオンクラスが相手では相手が悪すぎるという事は俺という実例を持って痛感しているのだ。

「しかしレオ、まさかこんな形でお前と久しぶりに話す事になるとは」

「うん、まあね」

というか、さっきまで乙女さんだって気付かなかったから。

「まったく、今の今まで忘れていたとは、嘆かわしい……生活も少々自堕落気味みたいだしな」

ヤバ……説教の矛先が俺に。

「ほう、派手にやっているようだな、良いぞ良いぞ」

あ、館長登場。

「館長、おはようございます」

「おはよう、鉄、今日も指導か？」

「はい、先輩として後輩を導いていました」

「うむ！ならば 良し！ビシビシ鍛えてやれ」

さすが館長、ノリが体育会系だ……。

「では皆、今日も勉学に励めよ！」

そう言っただけで館長は去っていった。

「まあいい、とにかく近い内にお前の家を訪問するからそのつもりでな」

マジですかい……。

「そろそろHRだ、さっさと行け」

「はい……」

やっと解放された。

……ん？

「よっと、セーフティー！壁越えクリア！」

姫……………。

## NO SIDE

### 昼休み

「畜生おっ！！黒豆おかめ！ゼッター仕返ししてやる」

完璧な逆恨みであるがカニの闘志はみなぎっていた。

「戦闘力がレオと同等でも不意を付いて痛手を喰らわせればアイツのプライドはズタボロじゃあ！！」

最早勝つことよりも一矢報いることに主眼が置かれている。

「フカヒレ、お前も来い！！」

「は、俺？やだよ、ああいうタイプねーちゃんに似てて怖いんだよ」

「いや、やられっぱなしだからこそその克服でしょ？やられえっぱなしの君でいいかい？」

「そ、そうだよな、確かに俺のイズムに反する」

「フカヒレがいつも主張してる事は何さ」

「女の子は男に尽くすべし！コレは古来からの鉄則である！」

どこが？

「勘違いしている女は教育してやるッ！」

ツッコミ所満載の理論でフカヒレは燃え上がる。

フカヒレのこの主張は数年前に遡る。

当時のフカヒレはクラスメートの女の子を自分のガールフレンドにしようとして告白した、しかし……………

「フカヒレ君ってザリガニの臭いがするからイヤ」  
見事玉砕。

「そんな……俺本気だったのに……」

「何泣いてるの……やだ、気持ち悪い……」

フカヒレはレベルが上がった！女を殴れるようになった。

とまあ、こんな感じである。

「ま、そんなわけで俺は女子供には容赦しねえ」

「言ってる事は最低だけど今はそんなフカヒレが頼もしいなっ！」

そんなこんなで馬鹿二人は勝ち目の無い戦いに出陣する。

そんな様子をレオとスバルは呆れ顔で見つめていた。

そして……

「いくら強いといっても女子は女子！男子の腕力の前には……」

「制裁……」

「ぐっばああああ……」

フカヒレ、気絶して廊下でお寝んね状態。

「この役立たずが地面にキスしてな……」

更にカニの容赦ない追撃が入る。

「おい小さいの、もう気絶しているぞ………というかソイツはお前の仲間じゃないのか？」

「お前じゃないやい、蟹沢っていうちよつと微妙な苗字があるんだからなっ！それに小さいって何だコラ……」

「そんなに気にする事か？顔がそれだけ可愛ければいいじゃないか」

乙女は何気なく言っただつもりだろうがこの『かわいい』という言葉はカニの脳髓まで響いた。

「……………乙女さんってさあ、よく見たら結構格好いいね」  
蟹沢きぬ、陥落……。

そして翌日の木曜日

レオSIDE

現在俺は乙女さんに何時<sup>いつ</sup>リベンジを挑むか+リベンジのための適当な口実を考え中だ。

「対馬君、鉄先輩が呼んでるよ」

向こうから来ちゃったよ……。また説教か？

「スバル、30秒後に電話頼む」

「あいよ」

それだけ聞いて廊下に出る。

「ん、来たか……」

「うん、で、何か用？」

ジャスト30秒、やれ！スバル！！

「ああ、すでにご両親から話は聞いているだろうが、私が明日から……」

~~~~~（↑ストリートファイターのM・バイソンのテーマ）。

携帯に着信が入る。さすがスバルだ、時間ぴったり。

「あ、ちよつとゴメン、もしもし……。え、マジで、うん分かった……ゴメン乙女さん、急用入った」

「ん、そうか？まあいい、どの道週末にまた会うんだからな」

よし、華麗にスルー出来たぜ。

しかし俺はまだ知らなかった。この時乙女さんが話そうとしていたのは非常に重要な事実だという事を。



再会 鉄の風紀委員、鉄乙女！！（後書き）

次の投稿は今夜0時です。

## 心とは何ぞや？

### レオSIDE

本日は毎週恒例の館長による授業、『心』を学ぶ独自のカリキュラム、その試験結果発表である。

「うむ、全員出席か、実に結構」

いや、アンタの授業をサボる命知らずはココにはおらん……。

「いつの世になっても体が資本であるのに変わりはないからな、それではこの間の試験を返却する！全員、戦場で敵を倒す兵士のように元気良く答案を受け取るように」

……………ノリが最早戦時中だ。しかし口がそんな事は裂けても言えない。

「俺、これだけは点数いいんだよな」

フカヒレは試験の名前を書く欄、男・女の男の部分に二重線を引き、『漢』と書くアホだ。

だが、これをするとな館長は5点アップしてくれる。それで良いのか？だが問題は結構面白い。『問1 お前の主張を書け』や、『問2

百人の命と一人の命、どっちを助ける？』など。

「とりあえず百人って書いたら。もらったよ」

「気分にもよるけど、もちろん両方助けるわよ、私、結構欲張りだし」

「一人と百人、その百人が他人で一人がダチだったとしたら、オレは一人だね」

「美人だけ助ける。後は自力で生き延びてくれ」

「うーん、私わからないって書いたらバツだった……どっちが正しいかわからなくて……」

上から力二、姫、スバル、フカヒレ、佐藤さんである。人それぞれ色んな考えがあるというのがよく分かる。

え？俺はなんて書いたって？

『出来る限り多くの命を助ける、100人も1人も関係なし、ただし助ける優先順位は選ぶ』だ。

「ま、若い内は色々やってみるが良い。恋愛、旅、スポーツ、勉強、何でも構わん」

何だかんだ言ってもこの人の言葉には重みがある。それがこの竜鳴館のクオリティの一つなんだろうな……………。

「いずれそれがお前たちの『力』になるだろう、例えば、儂<sup>わし</sup>のように体を日々鍛えていれば、熊九頭までなら素手で倒すことも可能になる」

（それはアンタだけだ）

まあ2〜3頭ぐらいなら何とか出来る自信はあるが……………。

「もし、日々がつまらぬ。日常がつまらぬ。毎日が同じことの繰り返しで何か刺激を求めている者がいたら、儂のところへ来い儂が心身を鍛え、面倒を見てやろう」

それはそれで面白そうだが怖いと言う思いが強いので止めとこう……………。

ようやく一日の授業が終わって帰りのHR。今日は中間考査の結果の総括。

「2・Cは7クラス中4位と、問題児揃いにしてはまずまずではありましたが」

祈ちゃんよ、仮にも担任ならそういう発言は控えてくれ。

「ですが、仇敵である2・Aには及びませんでした」

祈先生とA組の担任は対立関係にある。テストの成績でよく賭けをしているから、それに負けるのが癪らしい。っていうか俺達を勝手に賭けの対象にしないでよ……………。

「霧夜さんのワンマンクラスと言われては皆さんも心外でしょうし、

ここは一つ期末で順位昇格を狙おうではありませんか」

アンタの懐のためにか？

「ここで土永さんから一言」

「いいか、テストなんてただの記号だ。生きるための知識として通  
用するのは多くない……だが、しっかりやっといういい点取ってり  
や進路も増える、くだらねえがこれが日本のシステムだ、ま、がん  
ばれや」

「……と、土永さんが言ってますわ」

正論だが…… オウムに言われたくねーよ。

「あくまで私が言ったのではなく、オウムが鳴いただけ、というの  
お忘れなく」

そしてこの台詞である。この人はこういう所が抜け目無いんだよ  
なあ……………。

そしてまた、夜のダベリ。

暫くはタイトルマッチも無いので皆でのんびり出来るぜ。

「しかし、乙女さんか……俺のねーちゃん程酷くは無いけど、同情  
するぜ」

姉にトラウマの有るフカヒレが俺を哀れむような目で見てくる。

「まあ、確かに規則正しい分うるさいからな……昔は恐怖の対象だ  
ったからな」

ま、いずれリベンジするつもりだけど……………。

「そうそう、分かる分かる、姉ってさあ、怖いだけなんだ、人の体  
兵器で実験に使うしさ、背中に爆竹入れたりするんだぜ」

「そりやお前ん家のねーちゃんだけだ」

たまに恐ろしくなってしまう。あの時リベンジを誓わなかったら  
俺はフカヒレの同類になってしまったのではないかと……………。

「あ……………あ……………やべえ記憶が蘇ってきた……………！」

突然フカヒレが震えだした。トラウマモード突入だ。

「あーあ、トラウマが発動しちゃった」

「こうなると放置しておくしかないね」

「うわーん！止めてよお姉ちゃん、いくら声が似ているからって僕をM字ハゲにしないでよう！」

「難儀な奴だな」

フカヒレがトラウマから解放される日は……来ないだろうなあ……

……。

………あ、そういや乙女さんが明日会つとか言ってたけど、家に来るのか？

………ま、いつか。

心とは何ぞや？（後書き）

次話は本日正午投稿予定です。

ストックの残りがあと少し……。

まあ、あんまり気にしませんけどね。

## 雪辱日和

レオSIDE

土曜日の朝。俺は目を覚まし休日の恒例である片手逆立ち腕立て伏せを開始する。左右それぞれ100回で1セット、コレを3セット繰り返す。ちなみに普通の片手腕立てなら高速でも1000回は普通にイける。

コレを始めてもう結構経つ、割と続いているんだがどうにも俺は筋肉が付き難く、そのため割りと細身だ。

ま、そのおかげで無駄な筋肉が無く今みたいに身軽になれたんだけどな。

「98、99、100……よし、まず1セット」

『ピンポーン』

「?……はい、今出ます」

丁度1セット終わった頃、呼び鈴が鳴った。

「おはよう」

乙女さん………本当に来ちゃったよ。

「おはようございます……………」

「うむ、盟約どおり、私は今日からここで暮らす」  
は?

「あの、それはどういう……………」

「その間の抜けた顔は寝起きだな……………私は勝手にやるから、顔でも洗っている」

そのままズカズカと家の中に入っていく乙女さん。

「……………取り敢えず顔洗おう」

冷水で顔を濡らして頭を落ち着かせる……………よし、落ち着いた。

そして結論↓うん、やっぱりおかしい。

「ちよつと待った！何でいきなりそんな話になってんの！？ココで暮らすってどういう……」

「聞かなかったのか？私はここに卒業まで逗留する」 逗留って古い言い方だな……って違う違う違う！！

「ご両親から話を聞いていなかったのか？ 元々はそっちからの頼みだったハズだが……」

「頼みって何の……？」

「疑問文の応酬だな」

誰がそうさせた……。

「レオはどうにも頼りないからビシバシ鍛えてやってくれと言われてな、空手も破門されてしまったと聞いたしな、私もお前には鍛錬の必要ありと感じた、だからココに来た」

……………。

「本来ならお前が鉄家に来れば話は早いのだが、爺じいもいるからな……だが、私の実家は東京だ、通学には遠すぎる、実際私も朝早くから電車を乗り継いで通学していたが、家が遠くて不便だったからなだが、ここなら徒歩十分だ、私だって空いた時間を好きに使えるし、お前も引越さなくてすむ、家賃も無いし正直悪くない話だと思っただぞ」

さいですか……………。

「受験勉強もここですか？」

「私は推薦狙いだ、成績は問題ない、むしろ学校が近くなり、より風紀委員や部活に精が出せる、推薦狙いには丁度いい」

「でもさ、推薦狙いが男と同居してるってマズくない？」

「私とお前が赤の他人ならそれこそ大問題だがな、親戚同士で何が問題なものか」

「乙女さんのご両親はなんて？」

「もちろん両親も同意の上だ」

「俺の同意は？」

「……お前、私が嫌なのか」

嫌って程じゃないが、今すぐ同意しろと言われてもなあ……。

「乙女さんはそれで本当にいいの？俺と一つ屋根の下だよ？」

「私は一階の客間、お前は二階、さほど気にならん、第一軟弱なお前ごときに襲われるほど私はやわではない」

ん？聞き捨てならん言葉があつたが……まあいい、まずは……。  
「ちよつと待つてて、親に確認する」

……結果、両親も同意でした、ハイ。

「どうだった？」

「『伝えるの忘れてた』と」

なんつー親だ。

「コレで問題ないな」

「まあね、俺の意志以外は……性格合わないと思うよ、俺テンションに流されるの否定派だから、主導権が俺にあるっていうなら話は別だけど」

「その性格を含めて鍛え直すんだ、軟弱とテンションに流されない事は違う」

……へえ、そう言う。

「言ってくれるじゃん……でもさ、俺だつて意地つてもんがあるんだよ、少なくとも古い情報だけで心身ともに俺を舐めきつてる人と一緒に住みたいとは思わないね」

俺が挑発的に笑って見せると乙女さんは余裕綽々と言った感じに笑みを浮かべた。

「随分自信満々だな、何ならかかってくるか？一撃でも入れることが出来ればお前の勝ちにしてやる」

舐めやがって……！だけどリベンジマッチとしては悪くない！！

「それじゃ……………!!」

一瞬で距離を詰める。

「!？」

乙女さんの表情が一瞬で驚愕に変わる。その隙を見逃しはしない!!

スピードを乗せた左フックを乙女さんの眼前で寸止めする。

「!?(み、見えなかった……………だ)」

寸止めとは言え思わぬ一撃に狼狽する乙女さん、当然だ、油断しきっている状態で俺のスピードは捉えられない。館長クラスであれば話は別だが……………。

「『男子三日会わざれば刮目して見よ』……………それは俺にも当て嵌まるんだぜ」

「……………レオ、お前」

「ルール変更して戦<sup>や</sup>る? 戦<sup>や</sup>るって言うなら本気出さないとね、お互いにさ」

挑発的に笑ってやる。もう俺はアンタに駄馬と呼ばれていた俺じゃないんだ。

「……………お前への認識を改める必要があるな」

静かに此方を睨みつけてくる乙女さんに俺は表情を引き締める。

「ココじゃ何だし、場所移そうか……………」

「そうだな、学園の道場で戦<sup>や</sup>るぞ、あそこなら今日は人がいないから思う存分戦れる」

上等、白黒はつきり付けてやるよ。

フカヒレSIDE

街を歩いていたら妙な光景を見た!

レオと乙女さんが二人揃って歩いてやがる。

しかもレオの表情、滅多に見せない戦闘モードだったし！  
なんか凄い事になりそうだ、カニとスバルにも知らせねえと……。

エリカSIDE

突然頭に何か妙な感覚が走った。虫の知らせって奴かしら？  
「学校の方？何かビッグイベントな予感」

## 雪辱日和（後書き）

次話は今夜0時更新予定です。

激突！――若き獅子の咆哮――

レオSIDE

更衣室で愛用のタンクトップとパンタロンに着替え、道場にて乙女さん（こっちは拳法着）と相對する。しかし……。

「何でこうなってるの？」

「私に聞くな」

周囲には力二達＋姫、更には館長まで居る。館長は審判を買って出てくれたからいいとして……。

「うおおおお！いつかはやると思ってたけど遂に始まるぜ最強のドリームマッチー！」

興奮してはしゃぐ力二、うるさい……………。

「まさかこんなに早くレオがリベンジに挑むなんてな、俺の予想じゃあと1ヶ月ぐらいは掛かると思ってたのに」

「乙女センパイに何処まで持つかしら？」

姫、俺が負けること前提で考えるなよ。

「いや、レオはああ見えて強いぜ、普段喧嘩なんてしないが見えない所で相当場数踏んでるからな」

皆口々に言いたい事言いやがって。

「では、準備は良いな？」

「いつでも構いません」

「こっちも」

「うむ……ルールを確認しておくぞ、噛み付きと目潰し、急所への集中攻撃は無し、それ以外は特に問題ない」

そいつは良いお互い全力で闘り合えるってもんだ。

「では……………始めー！」

館長の怒声と同時に俺達は互いに踏み込んだ。

## 乙女SIDE

両者同時に踏み込む。先に仕掛けたのはレオだ。

「ラァッ!!」

とてつもなく速い拳が連続して私に襲い掛かる。

(!?!?!?!?! 速い!)

すかさず腕でガードするが……は、速過ぎる!! ガードが追いつかない。

「クッ……」

数発喰らってしまった、なんて鋭い拳だ……。

「だが、パワーは私が上だ!!」

レオの拳に耐え、カウンター気味に此方も拳を繰り出す。

「グウッ……」

掌で受け止めるがレオは苦悶の表情を見せる。

「痛ってえ、ったく、何てパワーだよ……」

一旦距離を取り合い、レオは私の拳を受け止めた手を振りながら言う。

「そっちこそ、とんでもないスピードだな、軟弱という言葉は撤回してやる」

認めざるを得ないな……コイツはもう根性無しだった頃のレオじゃない。

だが、勝つのは私だ!!

## レオSIDE

「準備運動はコレで終わり、こっからは本<sup>マジ</sup>気で行くよ」

「いいだろう、こちらも存分に行かせてもらおう」

再び構えてじりじりと距離を詰め、一定まで近づく。

「ハアアアアア!!」

今度は乙女さんが先に仕掛けてきた。

とんでもない威力の右ストレート、正面突破か? 当然身を屈めて避ける!

「墳っ!!」

ゲ!? 読まれた! 膝が目の前に!!

「チイツ!!」

さつきみたく掌で防ぐが、勢いは大して衰えず俺の手諸共顔面に入る。

(痛っでえ……)

手がクッション代わりになったとはいえかなり痛い。まともに食らえば大ダメージは必至だ。

(けど元は取った!)

「うわっ!?!」

すかさず乙女さんの足を掴んでドラゴンスクリューで投げ飛ばし、ダウンさせる。

「もらった!!」

再び乙女さんの足を掴み、プロレスの関節技スピニング・トゥーホールドで足を締め上げる。

「ウグッ……離せ!!」

一瞬苦悶の表情を見せる乙女さんだが即座に空いている足で俺を弾き飛ばす。

「……………」

お互い無言のまま体勢を立て直し睨み合う。

「……………」

直後に二人同時に踏み込み、拳を連続して繰り出し合う。

「ダアアアア!!!!」

「ウラアアア!!!!」

お互いにラッシュの応酬。乙女さんのパンチは凄まじいパワーと重さがあつて威力で言えば確実に俺の上を行っている。

だが俺のパンチには乙女さん以上の手数とスピードがあり、尚且つスピードによる鋭さが加わり、乙女さん程ではないにせよ威力も高い。

「ハアッ!」

「ウラアッ!」

お互いのストレートが顔面に入り、俺達は面白いように同時に仰け反った。

「クッ……やるな……」

「……そりゃ、どーも」

暫く続いた殴り合いが一区切りし、軽口を叩きあう。

「そろそろ本気で行かせて貰う!」

乙女さんがまた俺に襲い掛かってくる。俺は再び迎え撃つが……。

「!？」

パワーがさつきより上がっている!? ヤバイ、押し負ける!

「ハアアアアア!」

「ガッ……!」

乙女さんの蹴りにガードを崩され、乙女さんはそのまま俺の胸板を踏み倒した。

「ゲハアッ!」

「もらった!」

ダウンした俺に馬乗りになつて俺の顔面にパンチの連打を浴びせてくる。

「うわ、顔面をモロに……」

「こりゃヤバイぞ……」

「さすがに乙女センパイが相手じゃここら辺が限界なのね……」  
言いたい放題なギャラリ!

(畜生……まだ、負けてたまるか!)

両手でガードして耐える、耐え続ける。

「これで終わりだ!!」

乙女さんがフィニッシュと言わんばかりの拳を振り上げる。たぶんガードも突き破るほどの渾身の一撃だろう。

(今だ!!)

大振りになった隙に乙女さんの頭を掴み、渾身の力で締め上げる。

「グアアアアアッ!!!!!!」

「ぬおおおおお!!!!!!」

更に力を込めながら乙女さんをマウントポジションから引き離す。

「出たぜ!レオの十八番、アイアンクロー!!」  
オハコ

「グウウ……………こ、この!!」

「おっと!」

蹴りを繰り出して俺を引き離そうとする乙女さんだったが俺はすぐにアイアンクローをはずしてそれを回避する。

「クウ…何て握力だ、今のはかなり効いたぞ……………」

頭を抑えながら乙女さんは唸り声を上げる。

「へへ…………俺も握力なら乙女さんのパワーにも負けない自信があるんでね…………次はこっちが本気を見せてやるよ」

両手の指先に力を集中させる。見せてやるぜ、とっておきのあの技を。

## NO SIDE

レオが指先に力を集中させた直後、その変化は周囲にも伝わった。外見自体は何も変わらない。しかし何かが変わったのが空気を通して伝わってくる。

「むう…………あの技は…………まさしく鉄装拳!」  
てっそうけん

百戦錬磨の武人である平蔵は直感でレオの技の正体を見抜いた。

「《鉄装拳》

かの豊臣秀吉によって行われた刀狩によって民衆は武器を持つ事を固く禁じられた。

そこで生み出された二大活殺術が身の回りの日用品を武器と化して戦う無限流活殺術とそれに対を成す鉄装拳である。

その極意とは、氣で己の肉体をコントロールし、鉄装拳の名の示す通り自らの手足や体を鉄の如く硬く強化する事にある。

強化された肉体は拳や脚はあらゆる物を打ち砕く鈍器となり、手刀は鋭い刃物と化す、文字通り『人間凶器』と呼ぶにふさわしい肉体となる。

なお、現在でも硬く握り締めた拳を『鉄拳』と呼ぶのはその名残である。

民明書房刊 世界・

男の拳大全より」

（クツ……何という闘志だ、コレがレオの本当の力なのか？）

流石の乙女も戦慄を隠せない。今までこれ程の闘志を燃やす相手は祖父や平蔵を除いて見た事が無い。

（あれを避けるのは……無理か、悔しいがスピードも手数もアイツの方が上だ、ならば……真っ向勝負だ！！）

元々逃げの一手は彼女の性分ではない。

それならばと正面から迎え撃つ事こそ美徳と考えるのが彼女、鉄乙女なのだ。

「行くぜ！！」

俊足ともいえる速度でレオは乙女に接近し凄まじい速度の蹴りを見舞う。

「グウツ……！！？（な、なんて硬さと鋭さだ）」

まるで鈍器で殴られたような感覚に乙女は一瞬ではあるがたじろいでしまう。

そしてそれを逃すほどレオは甘くは無い。

「うおおおおおおお！！！！」

咆哮と共にレオは両拳で乙女の顔面を乱打する。

「ゲ……ガッ！！？」

凄まじい連打に瞬く間に乙女はサンドバック状態になってしまう。

「こ……の………舐めるなあああー！！！！！！！！」

だが乙女の目はまだ死んではいない。乙女が反撃に移り再びラッシュの応酬に入る両者。しかしその凄まじさは先ほどのものの日ではない。

両者の拳が、脚が、相手に噛み付くように襲い掛かり、瞬く間に互いの傷が増えていく。

「うおおあああああー！！！！！！！！」

「甘い！！」

レオの右ストレートをかわし、乙女はレオの頭部をヘッドロックで捉え、そのままレオをブルドッキングヘッドロックで床に叩きつける。

「ブッ！……こ、の…野郎！！」

ダメージを受けつつもレオは乙女の髪を掴み、ヘッドバットを叩き込む。

鉄装拳で強化したヘッドバットである。その威力は絶大だ。

「ぐああああ！！……クウッ」

お互い顔を傷だらけにし、体中ズタボロになりながらも二人の立ち上がり、その目は未だ闘志に燃えている。

そんな二人の様子にギャラー達も開いた口が塞がらないといった様子だ。

「ハアハア……ココまで私がボロボロになってしまうとは……………見直したぞ、レオ……………」

「ハアハア……見直したって言うならさあ、降参してくれない？」



「ぬおおおおおおお！！！！！！」

流石に浅いとはいえ目茶苦茶痛い。だが、それでもこの腕を掴む！！掴んで、投げ飛ばす！！

「な！？」

「吹っ飛ばえええええー！！！！！！！！！！」

我武者羅に腕の力だけで乙女さんを投げ飛ばす。

「カハッ！」

やった、成功だ！！

投げ飛ばされた乙女さんは床に叩きつけられるが、それでも立ち上がろうとする。

まだ終わりじゃない。止めを怠る事は敗北に繋がる。

俺は乙女さんの両足を掴んで再びダウンさせる。

「『天使のように繊細に』そして……」

そのままジャイアントスイングに捉えて振り回す。

「『悪魔の様に大胆に』だ！！」

「グウ……ウウ……」

そのままぶん投げ、直後に間髪入れずに接近、再び掴みかかりローリング・クレイドルで三半規管を狂わせる。

「ク……ドリアアアアア！！！！」

傷による痛みを訴える体に鞭打ち、エアプレンスピンで上空に投げ飛ばす。

「これで……ラストおおおおお！！！！」

落下する位置に立ち、直立不動のまま拳を振り上げる！！

「我流連撃・風林火山……………」

「ガ……ハッ……」

乙女さんが気を失ったのを確認し、俺は彼女を降ろした。

「そこまで！勝者、対馬レオ！！」

館長が俺の勝利を宣言する。俺は……勝った……！

「は、ハハ……勝った……勝ったぞおおー！！！！！！！！！！」

乙女さんに勝った。その歡喜に俺は腹の底から叫んだ。



## 激突！〜若き獅子の咆哮〜（後書き）

### 技解説

スピニング・トゥーホールド

仰向けに寝ている相手の片足を取り、自分の足を差し込んで締め上げる関節技。この体勢から差し込んだ足を軸にして自ら回転する事で、さらに威力が増す。

元ネタはキン肉マンに登場するテリーマンの得意技。

風林火山

元ネタはキン肉マンの必殺技の一つ。

原作では

相手の身体をつかんで回転しながら投げる（風）↓ローリング・クレイドル（林）↓パイロ・ドライバー（火）↓ロメロ・スペシャル（山）

であるが、本作のレオは

ジャイアントスイング（風）↓ローリング・クレイドル（林）↓エアプレンスピン（火）↓上空への正拳突き（山）  
という形にアレンジしている。

鉄装拳

氣で自らの肉体を硬く強化する技。

繰り出される攻撃はレオの持つスピードも加わり絶大な威力を持つ。  
イメージ的にはHUNTER×HUNTERの『流』

真空鉄碎拳

氣を拳のみに集中させて放つ渾身のストレート。

基本的な原理は鉄装拳と同じ。

イメージ的にはHUNTER×HUNTERの『硬』

なお、レオの戦闘時の服装はキン肉マンに登場するキン肉マングレートをイメージしています。

次回は本日正午更新です。

## 雨降って地固まる

### NO SIDE

闘いが終わってから数十分後、気絶から目を覚ました乙女の姿はシャワー室に在った。

「負けてしまったか……………」

シャワーから流れ出る水が傷に染みる度に負けを実感してしまう。

「昔のままだと思って慢心した報いか…………アハハ」

自嘲気味に笑みを零す。しかしその表情は儚く、悲壮感溢れるものだった。

「くっ……………」

自嘲的な笑いが次第に嗚咽に変わる。

「畜生…………畜生っ……………！！」

声を押し殺しながら乙女は敗北の悔しさに涙を流す。

しかしせめてもの抵抗で叫んだりしない。あくまで声を押し殺しながら咽び泣く。

「…………このまま終わりはしない、私はもつと強くなる！！」

思いつきり泣いた後、乙女は強い意志を孕んだ瞳を取り戻す。

ただ泣くだけでは終わらない。負けの中にも好敵手を得たと言う喜びを見出す、それが彼女、鉄乙女の強さなのだ。

### レオSIDE

試合の後、カニたちは先に帰り俺も一休みした後帰る支度をする。

「痛てて…………うっこりゃ明日全身筋肉痛決定だな」

勝利の代償は結構重い…………でもまあ、長年の悲願が達成でき

た訳だし、よしとするか。

「まだ居たのか？」

不意に後ろから声を掛けられ、振り向くとそこには私服に着替えた乙女さんが居た。

泣いた直後なのか真っ赤に充血した眼や顔中に貼った絆創膏や湿布を見るとさすがに悪い事をしてしまったと思ってしまう。

「何心配そうな顔してるんだ、お前は私に勝ったんだ、もっと胸を張ったらどうだ？」

そう言って俺を叱咤してくる。立ち直りが早いというか器が大きいと言っか、何だかんだ言ってそこら辺はまだまだこの人には敵わないと思う。

「今回は私の負けだが、次は負けんぞ」

やや挑発的な笑みを浮かべて俺に手を差し出してくる。

「上等、ただし怪我が完治してからだけだね」

そう言って苦笑いしながら俺は差し出された手を握った。

「あ、そういえば、結局俺ん家に住むって話どうすんの？」

いつの間にか勝負云々になっていたのですっかり忘れていた。

「ん？そういえばそうだったな、まあ、どっち道勝負に勝ったのはお前だし、お前が決めれば良いさ」

うーん、一人暮らしを取るか、乙女さんを取るか……正直気楽な一人暮らしを捨てるのは惜しい、だけど……。

「一緒に暮らす、かな？そっちがそれで良いならだけど」  
「……」

驚いたように目を見開く乙女さん。え、何？そんなに意外？

「意外だな、てっきり断るとばかり思っていたが」

「ズタボロにしていると言っのも変だけど、別に乙女さんが嫌いって訳じゃないから、勝負と家族愛は別物<sup>リベンジ</sup>ってね」

「そつだな、私もそれは同じだ、これからよろしくな、レオ」  
そつ言つて乙女さんは俺の方を向いて満面の笑顔をみせてきた。

## 雨降って地固まる（後書き）

遂にストックこれで最後。

申し訳ありませんが、また更新速度が以前の状態に戻ります。

あと、感想の制限を解除しました（今気づいた）。

## 歓迎会

レオSIDE

乙女さんとの壮絶な試合の後、流石にズタボロになったその日は無理なのでその翌日の日曜日、全身筋肉痛の体に鞭打って引越しの作業を終え、その日の夜はスバルが作った豪勢な飯を5人で囲みながら乙女さんの歓迎会となった。

「よし、宴もたけなわということで隠し芸行こうぜ」

「はい！ 1番蟹沢きぬ、モノマネいきまーす」

？カニの奴誰のモノマネする気だ？

「テンションに身を任せるなんて俺はゴメンだぜ……」

……オイ。

「次ぎ戦るときはキッチリ腕磨いて来い、新人潰しなんてセコイ真似せずにな」

「それが、この俺だというのか？ ええ、オイ」

ムカついたのでカニの頬を引っ張りあげる。

「ふは、はひほふるははへ（うわ、何をする離せ）」

「いや、コレ似てるぜ」

「つていうかそっくりで面白」

「特徴を良く捉えているな」

え？俺ってこんななの？流石に凹むぞ。

「よし、次は私がやろう」

2番手は乙女さんか、それじゃ、コレ渡さないと。

「はい、コレ」

そう言って俺は乙女さんにリングを手渡した。

「？なんだこのリングは」

「片手で握りつぶすんでしょ？」

「『乙女』がそんなことできるか！」

怒鳴り声と同時に乙女さんの手の中にあるリンゴはグシャリと粉々に砕け散った。

結局してるじゃん……。

「うわ、スッゲー……」

「……まあ、これは置いといてだな」

リンゴの欠片を食べながら乙女さんはこちらに向き直る。

「私がやるのは手品だ、この10円玉が2つに増える」

（手品？乙女さんて昔から不器用だったはずじゃ……）

手の平に10円玉を握り締める乙女さん。

「ワン、ツー、スリー！」

手を開く。中からは1枚だけの10円玉が……。

「1枚のままだけど」

「く……また失敗か……何故だ!？」

無念そうに乙女さんは10円玉を握り締め、10円玉は見事に2つにへし曲がった。

「うわぁ、二つに折れた!？」

「底知れない人だな、こんな芸レオや館長以外で出来る人が居るとはな」

「っていつか……」。

「手先が不器用なのに手品なんて何故？」

「む……それは秘密だ、それよりレオお前も何かやったらどうだ？」

え、俺？

「お、そりゃ良いぜ、その次はスバル、そして締めは俺が格好よく決めてやるよ」

さりげなく取りを手に入れて格好付けようとしてるよコイツ……。

「おいレオ、ちょっと耳貸せ」

カニが俺に何か耳打ちしてくる……成る程、そりゃ良い。  
い。

「主も悪<sup>ぬじ</sup>よのう」

「オメエ程じゃないぜ、へっへっへ……………」  
さてと、それじゃやるか。

手の平サイズのゴムボールを5個持つてきて準備に入る。

「フカヒレ、ちよつと来てくれ、お前の力が必要だ」

「ん、何々？俺の力が必要？しょうがないなあレオは」

網に掛かった馬鹿が一匹。チヨロイもんだぜ。

「対馬レオ、ジャグリングしながらフカヒレを屈服させます」

「ちよつ、お前何言つて！？」

「レオ、お前ジャグリングなんて出来たのか？」

乙女さんはジャグリングの方に目が行ってフカヒレの事はガン無視だ。

「ちよつ、無視しないでよ乙女さん！」

逃げようとするフカヒレを抑えながら俺は5つのボールを使ってジャグリングを始める。

「姉ちゃんが帰ってくるぞ、今すぐお前の所に戻ってくるぞ」

「ちよ、何言つてんだよ、やめろよ……………」

フカヒレに聞こえるように『姉ちゃん』という言葉を連呼する。

「ほう、コレは中々大したものだな、今度私にも教えてくれ」

「うわーん！やめてよお姉ちゃん！飲尿健康法なんて僕で試さないでよう！しかもそれ犬のオシッコだよー！！」

馬鹿の声が聞こえた気がするが、気のせい気のせい（笑）。

一通り騒いで宴も終わりとなり、後片付けの時間となった。

「ところでレオ、お前は彼女とかいないのか？」

乙女さんが唐突にそんな事を訊ねてきた。

「いませんよ」

何故かフカヒレが嬉しそうに答えた。

「坊主もモテないって事は無いんだがな……………女性ファンも何人かい

るんだが、何だかんだでコイツ奥手だからな」

え！？

「おい、女性ファンって……初耳だぞそんなの」  
いや本当にマジで。

「は？知らなかったのかよ！？お前闘技場の女性客に結構人気なんだぞ」

「何いいい！？本当かよスバル、俺も知らなかったぜ」

「どーいう事がじっくり教えろや、レオテメエー！！」

なんでフカヒレとカニまで反応するんだ？つか、俺も全然知らないから。

「お前この前の試合の後、女の客に花貰ってたろ」

「は？アレそういう意味なのか？」

知らなかった……。

「成る程、奥手に加えて鈍感か、コレなら彼女が出来るのに時間が掛かるというものだ」

乙女さんは乙女さんでなんか納得しちゃってるし。

その傍らでフカヒレは血の涙を流し、カニは不機嫌オーラを醸し出していた。

「しかし、お前たちは何だかんだで仲が良くていいな……明日の放課後、ちょっと連れて行きたい所があるんだが、教室で待っててくれないか？」

「どこスか？」

興味深々な様子でフカヒレが訊ねる。

「それは行つてのお楽しみだ」

何か微妙に気になるな。

……………こうしてそれなりに楽しい歓迎会は終わった。

「所で、伊達は何故あんなに料理が得意なんだ？」

家事の役割分担の話の途中でふと思いついたのだろうか、乙女さんが聞いてきた。

「嫌な家庭の事情だよ、母親が家出てるし、父親とも仲が悪いからそれを聞いて乙女さんは何か言いたげな顔になるが俺はそれより先に話を続ける。

「俺達みたいになともな親が居る人間には完全には理解できないけど、世の中どうしようもない親っているから、中学の時の先輩にもそういう人いたし……そういう人の心の傷ってさ、乙女さんや俺が考えてるよりずっと深刻なんだよ」

「だが……いや、やめよういくら親しい人間でもそいつの家庭環境に口を出す権利は無いしな」

確かに……。こればかりは当事者で解決しなきゃいけない問題だ。

## 歓迎会（後書き）

現在の対馬家におけるヒエラルキー

乙女（一応年功序列で）レオ スバル>>>冷蔵庫>>>カニ>  
>>ボディーソープ>>>越えられない壁>>>>断崖絶壁>  
>>>>フカヒレ

番外編 修行時代 My Teacher is Mustang Man

番外編です。

今回は格闘ゲーム『龍虎の拳』のキャラが1名登場します。

レオSIDE

懐かしい夢を見た。約1年前のあの日々の夢を……………。

誰にだって挫折する事や壁にぶち当たる事は多い。

それを乗り越えることが出来るか否かは、その人間の實力もあるが、壁の大きさにもよる。

俺がぶち当たった壁は……余りにもでかかった……………。

俺が地下闘技場へ出入りし始めて3ヶ月……元々空手で鍛えていた事もあり、俺は3ヶ月と言うスピードでチャンピオンへの挑戦権を得た。

しかし……………その闘いで俺が得たものは、無様な敗北だった。

それもそのはず、この地下闘技場に登録されている闘士ファイターの實力はピンからキリ。

しかしその中でもチャンピオンの實力は余りにも大きすぎるのだ。

AからEにランク付けするとすれば当時の俺の實力はB。

コレだけ聞けばあと一歩なんて思われるかもしれないがそれは違う。それぞれのランクの強さを説明すれば。

E ↓ 街のチンピラ

D ↓ 格闘経験者（下級）

C ↓ 格闘経験者（中級）

B ↓ 格闘経験者（上級）

A ↓超人（乙女さんと同じぐらい）

俺は痛感した。所詮自分はスポーツレベルの格闘技で遊んでいるだけの甘ったるい人間だという事を……。このままBランクで小金を稼<sup>しょぼい</sup>ぐだけで終わってしまうのか……。それも仕方ないのかと思ったのも事実だ……。だけどそれ以上に勝ちたかった。

テンションなんか身を流すのは馬鹿のする事だってのは解ってる、だけどそれでも勝ちたい。

コレがただのトラブルなら波風立てずに終わったって良い、だが勝負事だけは話は別だ！！

そんな時だった、フカヒレの奴がある一枚のチラシを持ってやってきたのは……。

「コレ見ろよ、『元海軍大佐による格闘訓練合宿、米海軍・自衛隊の基地で開催！！軍人、民間人問わず参加者募集！！』だってさ、コレで一気に魅力アップだぜ！」

……元海軍大佐、面白い話だと思った。

その大佐とやらがどれほどのものか分からない。だけど強くなれる可能性が少しでもあるならそれに懸ける。

俺とフカヒレはコレまで溜めていた貯金を断腸の思いで下ろし、夏休みを返上する覚悟で基地へと向かった。

## NO SIDE

合宿にはかなりの人数が集まった。

レオとフカヒレ以外の民間人はもとより、軍所属の軍人も日米関係無く集まっている。

「スゲエ人数だな……」

「ああ、よくこれだけ集まったもんだ………お、来たぜ」

プロペラの回転音とエンジンの爆音と共にヘリが着陸し、中から一人の男が現れる。

緑色のノースリーブの軍服を纏い、オールバックにまとめた金髪に彫りの深い顔つきをした男だ。

「お、おいアレって……『青い疾風』じゃないか？」

誰かがそう言ったのを聞いてレオは目を見開く。

現在は退役しているがかつてアメリカ海軍に所属していたエースでその戦闘力は常人を遥かに超えていると聞く。

「フツ、随分と暇人が集まったもんじゃねえか……俺がお前達の教官を務めるジョン・クローリーだ」

その名を聞いた誰もが驚きと確信の表情を浮かべる。

そう、彼こそが『青い疾風』の異名を取る歴戦の勇士、ジョン・クローリーなのだ。

「長つたらしい説明は趣味じゃないんでな、早速訓練を始める、ただ言うておくが無理だと思ったり訓練に付いていけないと感じた奴はさっさと失せてもらって構わん、地獄の訓練で構わんと言う奴だけ残りな」

その言葉に動いたものは一人としていない。

いや、フカヒレだけは少し迷っているようだが……。

「全員参加だな、良い度胸だ……それじゃ、お前等全員コレを着ろ」

ジョンが取り出した物は黒いシャツだった。

何がなんだか分からないと言った様子で参加者達は次々とその服を受け取るが……。

「ぬおお！！重てっ！！」

「当たり前だ、ソイツは訓練用のおもり錘入りのシャツだからな、つべこべ言つてねえでさっさと着ろ！！」

ジョンの一喝に参加者達は次々とシャツを着ていく。

「よし、それじゃ全員、この基地の周囲を兎跳びで一周しろ」

「ゲエエツ！！む、無茶な！！」

フカヒレを始めとした軟弱な連中は即座に弱音を吐く。  
基地の周囲は数キロの距離がある。フカヒレのような体力の無い人間に出来るようなものじゃない。

「無理だったら帰れ、邪魔になるだけだ」

当然そんな軟弱な意見など一蹴され、参加者達は次々に兎跳びを開始する。

30分後

「俺もうダメ……帰る」

脱落者第1号、フカヒレこと鮫氷新一。

そしてフカヒレの脱落を境に次々と脱落していく参加者達。余談だが1日目にして半数近くが脱落した。

そんな中レオは只管兎跳びひたすらを続けていた。

レオは確信していた。この訓練をクリアすれば自分は強くなれると……。根拠などどうでもいい、しかし今日出会ったあの教官からはそれを信じる事が出来るほどの強さを感じる、ただそれだけだ。

（それだけで十分……）

この合宿は大当たりだ……レオは心の中でそう呟いた。

こうして、レオの地獄とも言える特訓は始まったのである。

レオSIDE

2ヶ月間に及ぶこの合宿は、文字通り地獄だった。

訓練方法は様々だったがいくつか例を挙げるとすると……。

## その1 超高速ベルトコンベアマラソン

文字通り超高速で動くベルトコンベアの上を走る。足が追いつかなければ後ろに設置してある電流が流れる壁に激突して強烈な電気ショックを喰らってしまう。

「ぬおおおおおおお！！！！！」

死に物狂いで走る。後ろから「ギヤアア！！！！」なんて悲鳴が聞こえてくる度に必死になってしまう。

「もっと速く走れ！ゴールにぶつ殺したい奴がいると思えば楽なものだろうが！！」

一番ぶつ殺してえのはアンタだよクソ教官が！！

## その2 地獄懸垂じごくけんすい

体に通常の2倍の錘を付けての懸垂。

規定回数をクリア出来なければ熱湯風呂へダイビング。

「197、198……」

こ、コレきつ過ぎる……………。

「熱いっ！！！！！」

また一人落ちた……うわ、目茶苦茶熱そう……。

落ちるのはもっと嫌だ……………！！！！！！

## その3 教官との組み手

訓練直後のズタボロの状態で教官と組み手である。

「メガスマッシュ！！」

「グギヤアアア！！！！！」

「フン、口ほどにも無い」

教官の突き出された両手から光の塊が飛び出し、俺をぶっ飛ばした。

つていうか気づって本当に飛ばせるんだな……。

「だがまあ、俺にメガスマッシュを使わせた事だけは褒めてやる」

「お、押忍……」

と、まあ……こんな感じで訓練は続いていく。

しかし人間のなれというものは凄まじく、合宿終盤にはいつの間にかこの地獄そのものと言える訓練も普通にこなせるようになっていた。

ちなみに……合宿に最後まで残っているのは俺一人だけだったりする。

そして合宿最終日……今回は卒業試験として教官から出されるある課題をこなさなければならない。

その課題とは……熊とのタイマンだ。

「……む、無茶苦茶だ、技なんて碌ろくに教えてもらってないのに……」

……」

そう、俺が今回の訓練でやってきた事は全て肉体改造、技なんて気のコントロールとそれによって使用可能な遠当て（飛び道具）『メガスマッシュ』しか教えてもらってない。

教官曰く「技なんて気の利いた物は自分で覚えろ」との事だ。

「よし、始め……」

俺の意思など無視して教官が空砲を鳴らし、熊が俺に襲い掛かってくる。

「や、やるしかないのか……」

襲い掛かってくる熊公に俺は身構えた。

## NO SIDE

レオと熊のタイマンが始まり数十分、遂に決着の時が来た。

「か……勝った……？」

軍配が上がったのレオだった。

レオ自身驚いている。死にたくない一心で熊と闘い、熊の持つパワーに怯みながらも、レオはその攻撃の殆どを見切り、最後は自らの腕で熊を投げ飛ばしてしまったのだ。

「ま、マジで強くなった………のか？俺は………」

驚きを隠せ無いレオ、しかしやがて徐々にではあるが心の中を喜びの感情が満たしていく。

「は、ハハ……や、やった……俺は………」

「喜ぶのはまだ早いぜ！！」

「！？」

突然何者かの声がレオの喜びの声を掻き消し、それと同時に何かがレオに襲い掛かってきた。

## レオSIDE

それは一瞬だった、突然教官が襲い掛かってきたのを認識した俺の体は瞬時に反応し、教官の顔面に裏拳を繰り出していた。

そしてそれを怯む事無く教官は顔面で受け止め、その衝撃で教官のサングラスは吹き飛んだ。そして直立不動のまま笑みを浮かべ、一言こつ言った。

「よし、合格だ！」

え？合格って……？

「お前は今の不意打ちに反応する事が出来た、戦場じゃ不意打ちな

んざ日常茶飯事、そしてお前はそれに対処できる力と熊をも倒す屈強な肉体を手に入れた、十分及第点だ」

……つまり俺は、今度こそ完全に合格したって事か！！

「対馬レオ、よく俺の訓練に最後まで付き合った、ココまでやる事が出来るとは思わなかったぜ」

「押忍！ありがとうございました！！」

「ではたった今を以って全訓練を終了する！！」

教官の宣言と共に遂に俺はこの地獄の訓練を終えたのだった。

## NO SIDE

そして、翌日

滑走路ではジョンがヘリに乗り込もうとしている。

「対馬！」

そういつてジョンはある物を投げ渡した。それは彼が先日まで着けていたサングラスだ。

「貴様が俺を殴ったときに吹っ飛んだサングラスだ、俺は傷物は好まんのでな、餞別代りに貴様にくれてやる」

それだけ言つてジョンはヘリに乗り込み、そして最後に一言こう言つた。

「次に会う時は敵同士だ、それまでに俺と互角ぐらいにはなつておきな！」

その言葉にレオは無言のまま敬礼で返す。

レオにとっては敬礼など自分の柄じゃないが、こうする事が最大の礼儀だとレオは感じていた。

そして離陸するヘリの中でジョンも笑みを浮かべながら敬礼をしたのであった。

そしてこれから約3カ月後、対馬レオは地下闘技場においてミドル級チャンピオンとして君臨する事となり、そして現在に至るのである。

番外編 修行時代 My Teacher is Mustang Man

どうだったでしょうか？

ツッコミ所は多いかもしれませんがご都合主義ということでご勘弁を（笑）

## 生徒会入会

レオSIDE

えゝ、昨日から従姉との同居を始めた対馬レオです。

現在朝食なんですが……メニューはおにぎり（形は歪）、乙女さんの手料理。

っていうか、乙女さんはコレしか作れないのだ。まあ、これはコレで美味いけど……。

「晩飯、俺が作るよ……」

「ん？料理できるのか？」

「一応、肉じゃがや玉子焼きぐらいはね、後は炒め物とか……手の込んだ料理はスバルに任せていたから」

「そ、そうか……（に、肉じゃがに玉子焼き……どれも私が失敗してきた料理じゃないか）……い、一応私も時間があれば作るう、お前だけに任せきりは不公平だからな」

……料理のレパトリーを増やした方が良さそうだ。

NO SIDE

そして放課後、昨日の言葉通りレオ達は乙女に連れられてある場所へ向かっていた。

竜鳴館に数多くある道場を通り過ぎ、着いた場所は……。

「もしかして連れて行きたい場所って、学食？」

口火を切ったのは力二だ。

「ああ、そこで待ち合わせしているのはその隣の主だな」

「それって竜宮の事？」

竜宮とは生徒会執行部の独立した木造建物の事である。

代々の生徒会長（女性）がそこで生徒会の運営を行っているのでその名が付いた。

つまり、待ち合わせしている人物とは……。

「乙女センパイ、こっちこっち」

「あれ？もしかして？」

予想通り、生徒会長霧夜エリカとその親友佐藤良美である。

「ああ、私はこの4人を生徒会メンバーに推薦する」

「は？」

突然予想もしてなかった事を言われ、レオは軽く混乱する。

「うゝん……ま、いいんじゃない」

姫、あっさり承諾。

「コレどういうこと？」

「聞いての通りだ、お前達を生徒会執行部のメンバーに推薦した」

「なんでまた？」

「うむ、つまりだ……」

端折って説明するとこんな感じだ。

現在の生徒会執行部メンバーは3人。

霧夜エリカ（生徒会長）

鉄乙女（副会長兼風紀委員）

佐藤良美（書記）

以上三名。要するに人手不足である。

「他にメンバー居なかったっけ？」

「フカヒレが珍しく至極真つ当な質問をした。」

「目障りなんでクビにしちゃった」

「なんともまあ、傍若無人な理由である。」

「問題なんて無いわよ、私の決めた事は絶対だし」

傍若無人な理由パート2（↑またかよ！）。

「それでも姫は人望はあるからな、面接には何人も来る……だが、能力は悪くないはずなのに片っ端から落としていく」

呆れ半分で乙女が補足した。

「気に入れば取るわよ、気に入らないだけ」

傍若無人な理由パート3（↑もういいっちゅうねん！）。

「じゃあ何でオレ達四人合格なんだ？」

レオ達の疑問をスバルが代表して訊ねる。

「そこら辺は貴方達を推薦した乙女センパイから聞いてみたら」  
そう言われて視線は乙女の方へ移る。

「陸上部の伊達は別として、基本的に暇そうだったからな、レオも闘技場に通ってるらしいが、どうせ夜までは暇だろう」

なんか嫌な理由である。

「あはは、暇人だつて、バカ丸出しー」

カニは自分もそれに含まれていることに気付かず笑い飛ばす。

「だが大きな理由は違うぞ、お前たちは何だかんだで普段罵り合いながらも信頼し合っている、欲しいのはチームワークだからな」

「だ、そうよ……私の方は面白そうってのが一番の理由かな？」

「安直な理由だね……」

最早呆れて物も言えないレオ。

「でも重要な事でしょ？」

「佐藤も異論は無いかな？」

「はい、4人増えれば助かります」

良美が優しい笑顔を見せ、なんとなくレオはそれに癒された。

「4人の了解は取ってなかったわね、どうする、手伝う？」

レオは少し考える、レオとしては夜まで暇なのは間違いない生徒会に入るのは別に問題ない。

それに美人揃いの生徒会に入ると言うのも悪い話じゃない。

（あれ？断る理由無いじゃん）

あっさり結論が出てしまうレオであった。

「俺は別に構わないけど、スバル達は？」

「俺、陸上部に所属してるんだが」

「そこら辺は考慮するわ、要は頭数だから、まあ少しは仕事してもらうけどね」

スバルもほぼ問題なし。さて、他は……。

「うーん、かつたるぞー」

さすがは蟹沢きぬ、予想通りダメ人間的な答えである。

「ふーむ、私がOK出したのに断られるのも癪だし……良いわ、竜宮（職場環境）を見てから決めてもらうから」

そう言って姫は立ち上がり、竜宮へと足を向ける。

「私は道場に顔を出してから行く、さつき覗いてみたら部員達め、気合が入ってなかった」

鬼の居ぬ間に何とやら……拳法部員の連中にレオは心の中で合掌した。

## レオSIDE

執行部の建物、『竜宮』は2階建て、1階はハッキリ言って物置同然だった。

イベントなどで使われる備品が積み上げられていた。

しかし2階はというと……。

「はい、ココが職場」

「なにい、ほとんど一軒家じゃん！」

カニの言う通り1階とはエライ違いだった。

机や椅子は勿論台所やソファ、パソコンからコーヒーに茶菓子まで完備されている。

その上漫画や雑誌まで置いてある、文字通り好き放題だ。

「成る程ね、姫が時々授業サボる時って」

「ええ、ココで寝てるわ、先生も来ないしね」

「そりや美味しいな、俺も使っていいのか？」

おいおいスバルよ、お前はいくら部活補正があるとはいえサボれるような余裕は無いぞ。

「結論は出たか？」

あ、そんな話してると乙女さんが戻ってきた。

「乙女センパイが来たし、丁度良いわね、対馬君はさっきOKだつて言ったし、他の3人も結論を聞かせてくれない？」

「はっ！答えは当然出ているんだぜ！最初からな！（こんな美人揃いの執行部聞いたことが無いね、絶対入る）」

あゝあ、邪念だらけな考えが丸分かりだぜ、フカヒレさんよ。

「ボクもやるよ、条件が気に入ったからね」

カニは物に釣られた典型だな。

「そんじゃ、どこまで力になれるか微妙なモンだが、オレもやってみるかな」

コレで全員参加か。

「コレでまとまったな」

「一気に4人が、景気良いわね、それじゃお茶会でもやりますか、よっぴー、お茶」

と、まあこんな感じで俺達は生徒会執行部に入会した。

## 生徒会入会（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

## 初仕事（前書き）

しばらくオリジナリティのない話になると思いますがどうかご勘弁を。

## 初仕事

レオSIDE

えー、どーもおはようございます、先日生徒会に参加した対馬レオです。

今日も乙女さんに起こされ、今は顔を洗って学園に行く準備をしている。

「今日は弁当いらないんだっとな」

「うん、学食で食うから」

こんな会話を終えて乙女さんは朝の時代劇のオープニングだけ見て一足先に学校へ行った。なんでも本人曰くコレを聞くと風紀委員として身が引き締まるらしい。

んで、朝飯だが……。

本日の朝食メニュー

肉じゃが（レオ作、昨日の晩飯の余り）

おにぎり（乙女さん作）

またおにぎりか……いや、美味しいから良いんだけどね。

ああ、なんか褒めてやりたい、肉じゃがという彩りを加えた自分自身を。

そして授業。現在は祈先生の担当、英語の時間だ。

「zzzz」

古今東西命知らずなバカというものは居るものであり、よりにもよって祈り先生の授業で居眠りをしているバカが居る。

そう、愛すべき馬鹿、カニだ。だが俺は優しいから起こさずそっとしておいた。

「ふぁ……よく寝た」

あ、起きた。

「お目覚め？ではお仕置きの時間ですわ」

「げえっ!!」

「約20分寝ていたので20P分の宿題を<sup>ページ</sup>ご用意しますわ」

「えええ、20P!?ま、負けてください先生」

「ダメと言ったらダメですわ」

あくまで上品な笑顔を崩さない祈先生。その笑顔が逆に怖い……。

「それをやってこない場合……島流しになります」

「や、やる、ボク喜んでやります!」

これぞ祈先生の授業の実態である。

勝手な真似する奴には厳しい刑罰が下される。俺でさえ恐怖を隠せない……。

そして放課後、生徒会にて……。

「で、それぞれの役職だけど、対馬君は副会長、カニっちとフカヒレ君は会計監査、伊達君はよっぴーの補佐、つまり書記ね、仕事についてはよっぴーか乙女センパイに聞いて」

「副会長ね、要するに乙女さんの降任って訳」

「ああ、これで私も風紀委員に専念できるからな、分からない事があれば遠慮なく聞いてくれ、私がしっかり教育してやる」

なんだか知らんが乙女さんはやる気満々である。

ちなみにカニとフカヒレの会計監査の仕事は殆ど名ばかり、要するに二人とも事務職においては戦力外通告である。

スバルは適任だ、アレで結構気配り上手で几帳面だしな。

「それじゃあ、早速仕事に入ってもらおうわ」

「何すりや良いの？」

「ファーストミッション・人材登用、折角4人入ったんだし、ココで一気に生徒会の頭数をそろえたいのよ、会計のポジションが1つ空いてるし、それにふさわしい人物をスカウトしてきて頂戴」

成る程ね、会計か……しっかりしてそうな奴が良いな……俺達じや無理だ。全員ちゃらんぽらんだし。

「スカウトするとしたら、やっぱり優秀な人材？」

しっかり者と言えば近衛を思い浮かべるが、アイツはダメだ。

アイツは超が付く程のアンチ姫だし、何よりカニがアイツの事を嫌って……いや、憎んでるからな……。

「とりあえず美人で胸が大きいのがいいわ」

「はあ……」

佐藤さんが溜息を吐く、実は姫はおっぱい大好きなおっぱい星人なのだ。

「あと、1年生が好ましいわ」

また条件が増えた……。

「それじゃ、士気向上のために霧夜スタンプ帳を授けます」

PCゲームシヨップとかで配布してそうなカードが配られる

「何だこれ？」

「成果を挙げるたびにスタンプ1個押してあげる、全部溜めるとどんな願いでも一つかなうという凄い特典があるわよ、勿論私の出来る範囲でだけど」

「ど、どんな願いでも適う!？」

そりや凄いな。

「ど、どんな願いでも……チキンカレーお腹いっぱいになるまで!」  
安っ! カニ、お前安すぎるぞ。

「新品のフライパンが欲しいな……」

家庭的だ、それでこそスバル。

「姫とデートしてえ!」

「デートか……ええ、『考慮』してあげるわ、今ならお得期間だよ

つぴー付き」

「ええ!？」

「メツサすげえ、両手に花かよ!もうその日は帰れねえよ!」

おい、フカヒレよ……姫は『考慮』すると言ったんだぞ、政治家の使う常套手段だ……はつきり言って非常にきな臭い。

つーか揃いも揃って皆安上がりだなあ、おい……俺の友達って物欲主義者ばかり……。

「対馬君は何か望み無いの？」

「俺?俺はそうだな……サウスタウンに行きたい」

「それってあのアメリカにあるっていう？」

「うん」

「7歳の頃に翁に連れて行ってもらったことがある、あそこは良いぞ凄まじい強さを誇る武道家達が沢山居る」

強者揃いの街にして武道家達の社交場。武の道を歩む者なら一度は行ってみたい場所だ。たしか教官もその街の出身だった筈。

「もしくは、全員でモツ鍋でも囲んで宴会かな」

「あら、急に庶民的になったわね?本当読めない男……コレだから対馬君は飽きないわ」

俺はアンタのお気に入りのおもちゃかよ?

「それじゃ頼んだわよ、タイムリミットは1週間」

「任しといてよ!」

既に臨戦態勢なフカヒレ。威勢『だけ』は一人前だ。

「それじゃ行くか」

## NO SIDE

さて、生徒会に入会して初仕事を任されたレオ達だが……

「本来なら飼い犬にはならない俺たちだけど」

「霧夜スタンプは是非ともほしい、ってことで気合入れて探そうよ！」

「ココまで意見が一致するのも珍しいな、オイ」

「人を動かすのは物欲で釣るのが一番って事だ」

「実際その通りである。大概の人間は物欲でいとも簡単に動いてしまうものなのである。」

「ま、俺だけ抜けるのは寝覚めが悪いからな、部活が味丸までは協力すつからよ」

「一年の可愛い子を連れて行けば良いんでしょう？　どついう風に動こうか？」

「それだつたら俺に任せてよ」

「真つ先にフカヒレが答える。やる気満々のようだ。しかし……。」

（（（不安だ……））））

殆ど当てにされてなかった……。

それでも他に意見を出すものがいなかったたので渋々レオ達はひとまずフカヒレに従い校門の前に移動する。

「ココで女の子が来るのを待つわけだ、で、その娘がイケてるようなら俺が声をかける、そのままキャッチして生徒会室へってね、シンプルだけど有効な作戦だろ？」

たしかに有効である。フカヒレでは不可能という点を除いてだが。「ナンパ作戦なら、美形のスバルでしょ」

「いや、かには慣れてるだろうけどスバルだと始めてみた人は怖がる可能性が極めて高い」

それは人によりけりなのだがフカヒレは決してその事を悟らせないように断言する。

「かといつてレオは初対面相手にベラベラ喋れる性格じゃない、つまりは俺に任せとけて事」

あくまで自分が行くという事は譲らないようだ。

「そこまでいうなら（勝手に）行け」

「任せな、カツコイイ所見せてやるよ」

意気揚々と突貫するフカヒレ。果たして彼は勧誘という名のナンパに成功するのだろうか？いや、ほぼ確実に不可能である（笑）。

## フカヒレSIDE

スバルは女子に人気があるし、レオは細マツチヨで引き締まった肉体<sup>からだ</sup>だから地味にもてる（本人に自覚は無い）からなあ。

俺の女にするんだから先にあいつ等に惚れられちゃ厄介だぜ。  
恋愛とは戦争だ、抜け駆け上等よ。

## NO SIDE

フカヒレが邪な考えに浸っていた時、一人の女子が校門の前に近づく。

「あつ、早速来たよ、アレなんてどうよ？」

「魅力度たつたの5……ゴミだ」  
酷い言い様である。

「そこまで悪くないだろ？」

「姫が53万ぐらいあるから、せめて4万ぐらいはほしいんだよ」

「オメー自分がオゲチャのくせに好き放題言うなあ」

カニが珍しく至極真つ当な意見を出す。

「男なんてそんなもんさ」

フカヒレがさわやかな笑顔で開き直る。全面否定できないのが少し悲しい所だが……………。

「次のはどうだ？」

「太ももがむちむちしていいな、でも唇が厚ぼつたいからボツだ」  
「さらにその次、今来たのは？」

「顎がしゃくれてる」

もう言いたい放題である。高望みもココまで来ると見苦しいのを  
通り越してしまう。

「贅沢すぎ……」

「じゃあ、アレぐらいにしておくか」

ようやくフカヒレは狙いを定める。なかなか可愛い二人組みの女  
の子達だ。

完全にフカヒレの趣味で選んでいるが。

「本当にやれるのか？」

「安心しろって、言葉の格闘戦ならお手のもんだ、やったるで!!」  
はい、この時点で既に失敗フラグ。

「ねえ君たち、ちょっといいかな？」

「はい？」

「生徒会に興味ない？」

「生徒会長には興味があります」

「そっか、あのさ、生徒会長がキミたちみたいな可愛い娘と一緒に  
仕事したがつてるんだ」

「あ、あなたも生徒会の一員なんですか？」

「ああ、俺は鮫氷新一、シャークって呼んでね、鮫って言ってもキ  
ミたちを食べたりしないから安心してね」

だんだん話がおかしな方向へと向かっていく。

「食べるっていやらしい意味と違うぜ？」

完全に自爆である。

「なんであいつはああも自爆するかね？」

カニの疑問に誰も答えることが出来ない、恐らくフカヒレ本人に  
も。

そうこうしているうちに、妙な展開になっているようだった。

「あ、あのお……」

「だからさ、ハアハア……ちょっと来るだけでも……な、いいだろ」  
「え、遠慮しておきますっ……」

「それともなんだあ？先輩の頼みが聞けないってのか？ 竜鳴館はワリと縦社会なんだぜ？」

あつーと、フカヒレ遂に強攻策に出た。

「そ、その」

「いいじゃないか、なな？親には内緒だぜ？」

「アホかテメエは！」

おーっと！？フカヒレのあまりに馬鹿な暴挙に業を煮やしてカニとスバルのツープラトン・ミドルキックがフカヒレに炸裂だあー！！

「ふぎやあああ！！！」

「いっぺん死んどけ、お前は！！！」

さらに吹っ飛んだフカヒレをレオが待ち受け、レッグラリアートで華麗に止めを刺した！！

「あべしっ！！！」

強烈なキックにフカヒレはその場に崩れ落ちる。

その姿はまさにモンゴルマンに成す術無く倒されたミスターカーメンを髣髴とさせる無様さであつた。

「あースマン、今起こったことは忘れてくれ、バスケットあげるから」

「い、いえ……／＼／＼」

何故か一年女子二人はレオを見て顔を赤らめていた。

たまにはあるが対馬レオはこんな風に本人の知らない所でフラグを立てて行くのである。

そして数分後、うめき声とともに、フカヒレは立ち上がる。生命力だけならゴキブリ並みである。

「おおあ……痛え、邪魔すんなよな、あと少しだったのに」

「どこがじゃーい！」

「グベッ！！！」

カニの逆水平チョップが、フカヒレを再びダウンさせた。

「お前ただの変態だったぞ」

「完全に怯えてたじゃん、一年生」

「わかったわかった、興奮してたことは認めてやる、でもさ……なんか俺、女の子を見るとすぐに頭の中でそいつを裸にしてるんだよな」

ココまで来るともう救い様が無いのを通り越して最早この男が何なのかさえ分からない。

「もういい……それ以上しゃべるな」

「次は真面目にいくさ、よし、単独で行動してるあの娘を狙うぜ」  
フカヒレ、再出撃。しかし……。

「HEY彼女、今一人？」

「何コイツ。キモイ」

はい、秒殺。フカヒレは肩を落としながら戻ってきた。

「つつかえねえヤツだなあ、このキモ野郎」

「お前、チビのクセに態度でかいんだよ！」

カニのダメ出しが引き金となり、フカヒレはやり場の無い怒りをかににぶつける。

「んだよ、相手にされなかった腹いせにボクの悪口を言おうってんだ！ サイター！」

「落ち着けて……こんな挑発に乗ってたらフカヒレの同類に思われるぞ」

「うわ、それ最悪、絶対嫌だし」

このままではまったくだらない乱闘になるのでレオはカニを止める。当然フカヒレの名誉など無視した止め方だが誰も咎めはしない。そもそもフカヒレに名誉なんてものがあるのかさえ疑わしい。

「畜生！！こうなったら今度こそ女をゲットしてやる！！」

ヤケクソ気味に再び特攻するフカヒレ。

下手な鉄砲数撃ちや当たるといいうが、弾丸そのものが発射の衝撃に耐えられず粉々に砕けてしまえば何の意味も無い。

フカヒレはまさにその典型と言えよう。そしてその事に当の本人は全く気付いてないので余計に性質が悪い。

「ねえねえキミたち、ちよつといいかな？」

「……」

今度はガン無視である。

「あの……キミ話聞いてる？」

「……」

「てめえ！ それほど美人でもないくせに、お高くとまってるんじゃないぞ！」

完全に無視を決められてフカヒレは遂に逆ギレする。本当に最低な男である。

最早これはナンパではなく単なる精神的な通り魔だ。

こんな奴を周囲の人間が放置しているはずも無く………。

「あいつです、あいつがなんかワタシを飢えたケダモノの目で見てるんです」

「ほう」

先ほどフカヒレを秒殺した女生徒が日本刀を持った女、つまり乙女を連れてきた。

それを眺めながらレオ達は一応有人としてコレからフカヒレが歩むであろう地獄を思い浮かべ、心の中で静かに合掌………したかどうかは定かでは無い。

「おい鮫氷」

「うるせえっ、俺は女でもグーで殴れるんだぞ！………って乙女さん！」

「制裁！」

その言葉と共に見事な蹴りがフカヒレに炸裂した。

「ありがとうございますっ！」

何故かお礼を言うフカヒレ。意外と体育会系なのかもしれない。

数分後

「——俺も仕事のためとはいえ、ちょっとはしゃぎ過ぎたって言うか……スイマセンでした」

「以後、気をつけるようにな。生徒会の問題にもなりかねんのだぞ」  
「怒られちゃった、うふふ」

なぜか嬉しそうに笑うフカヒレ。どうやらMの兆候があるようだ

フカヒレのナンパ勝負、その結果は……………負け!!

## 初仕事（後書き）

次回は明日の朝7時です。

ご意見・ご感想お待ちしています。

年下のあの娘はいろんな意味で辛口だ

レオSIDE

さて、フカヒレのアホが暴走した所為でこれ以上のナンパ作戦は無理と判断し、俺達は生徒会室へ戻った。

「あらあら」

何故かそこには寛いでいる祈先生の姿があった。

「なんで俺の祈先生がここにいるの？」

「さりげなく大胆な発言ね」

フカヒレの妄言に姫が突っ込む。あの姫に突っ込ませるとは……。私、フカヒレさんみたいな人は仕事でない限り声もかけたくありませんの。ごめんなさいね」

相変わらず笑顔できつい事をさらっと言うなあ……

「ま、こんな状態で始まる愛もあるさ」

しかしフカヒレはとてつもなくポジティブだった。

「祈センセイは生徒会執行部の顧問なの」

「顧問といっても運営方針に口出しはしませんわ、生徒は自主性を尊重し、すべてをお任せします」

祈先生の性格からしてその言葉は単なる建前。実際は丸投げの放任主義……。

「誰かいい人見つかったの？」

「残念ながら」

「まあ初日だしね。ちょっと気が早かったかな」

相変わらず佐藤さんは優しいなあ、癒されるぜ。

とりあえず俺のほうも新しい作戦を開始するか。

「佐藤さん、一年生の名簿とかある？」

「あるよ……はいこれ。この棚にあるのが資料だから、好きに見ていいよ……読み終わったら元の場所に戻しておいてね」

「ありがとう」

佐藤さんに礼を言って、名簿を開く。

当然の事ながら一年生の名前、住所、所属する部活まで全部書いている。

「一年の名簿見て適当に決めようぜ、作戦か？」

俺が名簿を開いたのを皮切りに皆が俺の周りに集まる。

「ああ、まず文化系か帰宅部を狙わんと、体育会系とヤンキーっぽい名前を避ける。単純な消去法だけど少しは効率上がるだろ」

忙しい運動部とかじゃ執行部を手伝う余裕はない。ヤンキーなんか論外。

「でも、いい作戦だね、ちょっと知識ひけらかして悪いけど、名は体を露にするって言うじゃない？大人しそうで、かつ可愛くて、先輩の命令だったら何でもしてくれそうな名前の子を選ぼうよ」

名前だけでそこまで分かれば苦労はせん。

「オイ、面白い名前があったぞ。これどうよ？北海道牛子。所属は手芸部」

「おお、いいねえ。でつかそうだねえ。胸なんかきつとホルスタインだぜ」

ま、とりあえず見に行ってみるか。

数十分後

偵察を終えた俺達の顔はきつと今凄く疲れた表情をしている事だろう。

「オージーザズ、胸どころか顔までホルスタインじゃねえか」

「人つてのは目鼻の配置の気まぐれであんな風になっちまうものなのか……」

何か黄昏たい気分だ……。

「もうすぐ陽が落ちるね……ね、ね、せっかく四階にいるんだし屋  
上じゃない？こっから見える夕陽キレイだからさ」  
グッドアイデア、たまにはカニも良い事を言う。

「うわぁ！キレイキレイ」

本当に良い眺めだ、カニがはしゃぐのも解る。

何だかんだでカニって結構センスあるんだよな。

「ロマンチックだねえ、夕陽見てるとギター弾きなくなるんだよな  
俺」

フカヒレも感慨深い表情で夕日を眺める。

「あれ？ボクたち以外に誰がいるよ」

カニが指差した方を見てみると確かに人がいた。端正な顔つきで  
やや釣り目の女だ

ん……？あの女どつかで……。

「あれも一年の女子だね」

「……」

視線を感じたのか、一年生は一瞬ちらりとこっちを向いたが俺達  
に興味は無いらしくすぐに目を逸らした。

「あ！？あれカレー屋を荒らしてくれた女だ……ボクたちと同じ学  
校だったんだ」

「あー、オアシスの」

漸く思い出した。彼女はカニのバイト先のカレー屋で俺が7口で  
ギブアップした超辛カレーを平らげたあの辛口キング（女だからク  
イーンか？）だ。

「気に入らないヤツだけど、同じ学校だったとはね……これは楽しく  
なってきたなあ」

カニは嫌な笑顔で、指関節をバキボキと鳴らす。

「先輩として色々教えてあげたい気分だねえ」

……絶対喧嘩売る気満々だよ。全くこの甲殻類は……。

「しかし、あれで一年か……なんか貫禄ねー？」

「ああ、大物っぽいな」

背は女にしちやかなり高い、170cmぐらいか？

しかも鋭い目つきで結構威圧感がある。フカヒレ程度の人間なら簡単に怯ませることも出来るだろう。

「よし、決めた！あいつを生徒会にスカウトだ！！」

「おいおい正気ですか？」

やめとけフカヒレ、お前じゃ120%無理だ。

「一年だし、美人じゃん。胸大きそうだし」

「オメー外見しか見てねーだろ」

「今、神が俺に囁いたんだよ、この娘にしろとっ！」

「それ邪神？」

どっちかって言うると低級霊だろ。コイツじゃ邪神でさえ囁くのを面倒臭がる気がするぞ。

「だってあの後ろ姿見てみるよ、なんか寂しいから誰か私を抱いて光線を放ってると思わない？」

「えー？ そうかあ？ オレには逆、他人は近づくな光線に見えるんだがなあ」

たぶんスバルの方が全面的に正しい。

なんというか、人を寄せ付けない嫌気オーラが漂ってるもん。

「大丈夫！なんたって俺は彼女にセイロントイーをおごったんだからさ、面識はある。余裕だぜ」

一回コイツのこの頭の中をのぞいてみたい………いや、やつぱり嫌だ。こちまで脳みそが腐る。

「400円から始まる恋もあつたていい！お前たちはここで待機、キスまで行っても指をくわえて見てるんだぞ」

「どこをどう計算したらキスまで行くんだよ」

「俺もとうとう彼女持ちかあ……おいカニ、帰ってきたら俺の顔、携帯で撮影してくれよな、一仕事やり終えた男の顔だからさ」

いや、戦いに敗れ去ってしよくれた男の顔だよきつと。

「ねえ、ちよつといいかい」  
フレンドリーに話し掛けるフカヒレにキングは無言で、そして面倒臭そうに振り向いた。

フカヒレSIDE

「パワー計測！」

俺の身体に内蔵されたおっぱいスカウターを起動する。

75……76……78……何い！！まだ上がるだど！？

「は、87……だど」

バスト87……最近の1年生は化け物か！？

やってやる、やってやるぞ！！必ずこの女を俺の手に！！

レオSIDE

「俺は2-Cの鮫氷新一、シャークって呼んでくれ、趣味は天体観測。わりと自然好きなんだ、好きな昆虫はコーカサスオカブト、あの威風堂々とした角になんか親近感」

勝手に自己紹介してるよ。この時点で失敗フラグだな。

「見苦しいよなあ……」

スバルが溜息混じりに呟く。いや、本当に見苦しいよ。

「あのさ、君、生徒会って興味ある？」

「ありません」

あ、即答だ。

こりゃダメだ、諦めて戻って来いフカヒレ。今ならまだ軽傷で済むぞ。

「実は生徒会では明日の学校を担うフレッシュな人材を募集しているんだ、カリスマ生徒会長、霧夜エリカの下でがんばってみる気はない？」

諦めの悪い奴だ……。どうなっても知らんぞ……。

「ありません」

冷淡な返答だ。思いつき拒絶してるよ。

フカヒレは一瞬たじろぐがそれでも諦めきれない様子だ。

「でもほら、生徒会の名簿見たけど部活無所属なんでしょ？青春を有意義に使う意味でも、生徒会どうかな？」

「仕事内容は簡単だよ、難しく考えないでいい」

「消えてください、興味ないです」

「ぐ……だ……」

「だったらさあ！」

「俺と付き合ってみればいいじゃない！」

カツと目を剥き、フカヒレは叫んだ。あーあ、やっちゃったよ……

…。

「新たな世界が生まれるかもしれないじゃない！」

「……」

「俺についてこい！」

誰もついて行こうと思わないよ、お前じゃ……。

「テンパって前後不覚になってるな」

それでもなおフカヒレは食い下がる。そして遂に辛口キングが口を開いた。

「気持ち悪い」

「キモ……？ちょっと待って、俺のどこが気持ち悪いんだよ！」

どこが……行動、言動、性癖etc………拳げればキリが無い。

「しつこい」

「ひっ」

キングの一睨みにフカヒレは小さく悲鳴を上げた。さっきまでの

威勢は何処へやら……。

「潰すぞ」

「ひいいいっ！」

キングの威圧にフカヒレは小走りで逃げ帰ってきた。

「うっ、うわあああああんっ！チクショー！」

「~~~~」

カシャカシャと電子音を鳴らしながらカニはフカヒレの無様な姿を携帯写真に収めていた。

「なあに写真撮ってたよ、このメス豚があ！」

「んだよ、そっちが撮れつつたんだろっ！」

コレばかりはカニの言うことが全面的に正しい。

「スバルウ！あいつシめてくれよ！」

あーあ、フカヒレの奴、いつものことながら錯乱しちゃったよ。

「落ち着け」

「おやおや精神的に参っちゃいましたかこのゴミは。ほんっと使えないクズだよね」

「女の子に厳しい子と言われると、姉へのトラウマが発動してしまっからな……本当に難儀なヤツだ」

仕方ないからフカヒレは放置だ。

「ちよつとボク行ってくるよ」

お？今度はカニか？

「説得？」

無理だろ、カニじゃ……フカヒレよりはマシだろうけど。

「まさか、あんな胸デカそーな女いらねーよ」

「それ私怨入ってるだろ……どうする気だ？」

「フカヒレはカスだけど、一応二年だよ？目上の者に対するハウトゥーを語ってあげるのさ、平たく言えばヤキ入れかな」

カニはテクテクと歩いていった。

「揉め事になったら止めるぞ」

「ほぼ確実に揉めるぜ、カニは」

あの性格だからな……

「よっ、辛口キング、ボクのことは当然覚えてるよね」

「ああ……鈴木さん」

「誰それ？ねえ誰？」

わざとらしく間違えるキング。あーこりや完全に挑発してるな。

「ボクだよ、カレーハウス“オアシス”の可愛いウエイトレス！」

「ああ……」

「こ、言葉遣いには気をつけなさいよ、ボク二年だから」

年齢で自分を上に見せようとしているかにだが、容姿も言動もそれをマイナスしてしまっている。

「縦社会とか嫌いなんだけどね？ それでも先輩に対する最低限の“敬い”は社会でやっていく上でとても必要だと思うんだよね、そこをいくとキミはまだまだそういうところが欠如してると思うんだよね」ボクは

お前が言っなお前が。

「……」

「いや、これは心配してるんだよ先輩として」

「……」

「まあ、ここは一つボクがキミの淀み腐った精神を叩き直してあげるよ」

淀み腐ってるのはお前だろ。

だからとりあえず大学食でジュースでも買ってき——」

「うるさいな」

キングがカニの量類を掴んで引っ張りあげる。

「んは！？」

「お似合い」

「ははへははへ！」

「聞こえない、しっかりしゃべって『先輩』」

「ぐおおおおお！」

あーあ、ダメだこりや。

それから少ししてキングはカニを解放した。

カニは涙腺がもろいので、もう涙目だ。

「うくっ……………う……………めえ……………夕陽の中で死ぬるとはなかなかオツだなあ、オイ！」

「結構いい性格してるぜ、あの女……………思ったより結構子供だなあいつも」

このままじゃ面倒な事になりそうなのでスバルと共に今にも飛び掛らんとしているカニを取り押さえる。

「そこまでにしとけや鈴木さん」

「そうだけ鈴木さん」

「だーれが鈴木さんじゃボケエ！ いいから放せ！こいつの命<sup>タマ</sup>だけは殺<sup>と</sup>つたる！」

じたばたと暴れるカニ、まさに荒ぶる獣だな。

「騒がしいので、失礼します『先輩』」

『先輩』の部分強調している。あからさまに嫌味を込めた呼び方だ。

「取り付く島がないな」

「ああ……………」

世の中ああいう人間もいるんだな……………。

「ボクが……………ボクがコケにされたままなんてえ！」

怒り冷めやらぬカニは、ポケットから手帳を取り出して何か書き込みはじめる。

なぜかそのページには俺の名前があり、今その下に『一年のクソ生意気な女』と追記された。

「それ何？」

「ボクの、殺したるリスト」

げげ……………こいつ俺に殺意まで抱いてたのかよ？恐ろしい奴だ。「殺すというより屈服させるっていうのが目的かな、乙女さんは良い人だったけど、アレは絶対悪だね、いずれボクの子分にしてイジメまくってやる！」

無理だと思うのは俺だけだろうか？

「次回！ボクのものすごい復讐！」

「……………なんか今遙か遠くから『勝手に次回予告するな！！』っていう声が聞こえたような気が……………誰の声だ？（↑作者の声だ）」

ってな訳で今回の生徒会人材発掘作業……………失敗。

## NO SIDE

今日もまた夜が来る。さて本日の対馬家の晩飯は……………。

「……………握り飯だ」

「……………頂きます」

本日の晩飯担当は乙女だが、また料理が上手くいかなかったらしい。

もはやレオは呆れる事さえ忘れてしまう。

「そういえば、副生徒会長の仕事ってどんなの？」

「ああ、基本的に姫のサポートだ」

「……………姫のサポート」

あの姫にサポートが必要かといわれると非常に微妙なのだが。

「ただ姫はあの通り仕事が完璧だから、副会長は飾りのようなものだ、だから私は風紀委員と掛け持ちできるんだ」

要するにレオも重要な仕事をする必要は全く無いということだ。

（何かカニやフカヒレと同列っぽくて少しショック）

実際はそんな事はないのだが（少なくともかにやフカヒレよりは仕事は多い）話だけ聞くとそんな風に思えてしまう。

「姫の言うことを聞いておけば問題ないが……………まあ、わからないことがあれば、その都度私に聞け」

「うん」

「で、いい人材は見つかったか？」

「収穫ナシ。六月からは本気を出すよ」

「そうか、まあ頑張れ」

何だかんだ言っても乙女は激励の言葉を忘れない人である。

（しかし、人材登用か…… 思っていたよりずっと厄介な仕事だぜ）  
握り飯を食べながらレオはふとそんな事を考えていた。

そして食後はしばしの休憩の後、レオと乙女によるスパーリングだ。

といっても自宅を壊すわけにも行かないので軽い打ち合い程度なのだが。

「破！！」

「っ！！」

乙女の繰り出す蹴りを上半身を反らしながら何度も回避する。

「であっ！！」

「甘い！！」

「チイツー！！」

すかさず反撃に移るレオ。目にも留まらぬ速さの蹴りが薙ぐ様に乙女を襲うが乙女はそれをガードし、直後にそれを掴みレオを投げ飛ばそうとする。

しかしレオも負けてはいない。空いた足で再び蹴りを繰り出し自らの足を掴む乙女の腕を蹴飛ばし投げから脱出する。

とても軽いとは言えない内容ではあるが二人にはコレで軽い方らしく、お互いに山道を散歩した程度の汗しか掻いていない。

「明日はエキシビジョンマッチだったな、差し支えるのもなんだ、コレぐらいにしておくか」

「そうだね」

普段は大雑把だが何だかんだ言って乙女さんは気配り上手だなと

思っレオであつた。

年下のあの娘はいろんな意味で辛口だ（後書き）

本日12時、番外編を投稿します。  
ご意見・ご感想お待ちしております。

番外編 フカヒレVS転生者!! (前書き)

今回は松上先生の『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』とのコラボです。

## 番外編 フカヒレVS転生者!!

### NO SIDE

これは我らが愛すべきヘタレ、フカヒレこと鮫氷新一の伝説を描いた番外編である。

この当時フカヒレは中学2年の14歳。事件はその年の12月25日、クリスマスの日に起きた。

### レオSIDE

あの事件の発端はフカヒレの奴が俺、スバル、カニに「お台場行こうぜ」と誘ってきた事から始まる。

別に断る理由は無かったので、承諾したのだが俺にはどうもフカヒレが邪なオーラを出してるようにしか思えなかった。

そして当日……案の定事件はおきた……………。

### フカヒレSIDE

遂に来た、この時が!!

思い起こせばアレは3ヶ月前、お台場に行った時、俺は見たんだ、天使を……。

3ヶ月前

ナンパしようと辺りをぶらぶら回っていたけどどいつもこいつも俺を見て逃げやがる、畜生！俺の何がいけないって言うんだ！？  
しかしそんな時だった。ある一人の少女が友達と共に歩いているのを見たのは。

（か……か……可愛い！！可愛すぎだろありゃあ！！）

その笑顔は文字通り天使の様な優しさを感じさせ、スマートな体つきと愛らしい顔つきをした10歳ぐらいの女の子だった。

ああ、神様仏様鴛人様、ありがとうございます！！この俺に運命の出会いをさせてくれて！！

後にストーキングして分かった事だが彼女の名前は八神ヒカリちゃん。お台場小学校の4年生だ。

3ヶ月もの念入りなストーキングと情報収集で遂に接触する機会を見つけた。

それが今日だ！ココで偶然を装って彼女に近づく、これしかない！！俺は待ち伏せして彼女とぶつかる準備をした。

NO SIDE

「痛っ！」

「キャッ！」

わざとらしくぶつかりフカヒレは早速難破を開始する。

「いやあ、ゴメンゴメン……大丈夫？怪我は無い？」

しかしフカヒレには一つ誤算があった。それは今自分の顔がにやけていたという事だ。この時点でヒカリは思いつきり警戒する事になる。

「あ、ハイ……大丈夫です」

そう言ってヒカリは立ち去ろうとするが。

「あ、ちよつと待ってよ……ぶつかっちゃったお詫びにお茶でも奢ってあげるよ」

「い、いえ……結構です」

警戒している相手を誘っている時点で既にこのナンパは失敗しているといつても過言ではない。

「そんな事言わずにさあ……ハアハア……すぐ終わるから……ハアハア」

「いいです！本当に結構ですから！！」

「それとも何だ？年上からの御厚意を無碍にする気が君は？」

遂に脅しに走った。

この時フカヒレは気付いていなかった。ある人影がこちらに向かっている事を。

「おい」

突然背後から一人の少年がフカヒレに怒りの籠もった声をかけてきた。

「何だよガキ！男はお呼びじゃないんだ消えろ！俺は女子供には容赦しない男なんだぞ！！」

「そうですか……じゃあこつちも容赦しねえ！！」

怒声と共に少年は右足を振り上げフカヒレの股間に強烈な金的を喰らわせた。

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:!!?!?!?!?!?」

男にとってそこは鍛え様の無い急所、フカヒレは突き抜けるような激痛に悶絶した。

「航君！」

ヒーローに救われたヒロインのようにヒカリは少年の下に駆け寄る。

彼こそが松上先生の作品『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』の主人公、加藤航である。

「て、テメエ……あと少しだったのに何しやがる、俺中学生だぞ……」

…」

「何があと少しだ！大体中学生なら小学生をナンパするな！！」  
最もな意見である。

「こ、この野郎！ガキの癖に、こうなったらテメエをぶちのめしてやる！！」

「やってみやがれメガネザルが！！」

航は今、完全に切れていた。無理も無い、意中の相手がこんなダメガネにナンパされるなど航からしてみればヒカリに對する最大の侮辱だ。

「喰らいやがれ！シャーク鯨氷の拳をなあ！！」

格好付けながらパンチを繰り出すフカヒレ。

しかし航はそれを避けてフカヒレの懷に飛び込み、レバーブローをお見舞いする。

「うげっ！？」

「ガキだからつてなめてんじゃねえ！！」

そのまま頭を掴んで鼻っ柱に頭突きを喰らわせる。

「ぶぐあっ！？」

鼻血を噴き出しながらフカヒレはダウンする。

大抵の人間は血を多く流すと怒りが冷めて戦意を喪失する。

レオやスバルならともかくフカヒレのような軟弱な人間では当然戦意は萎える。

「ひ、ヒイ……」

かくしてフカヒレは、小学生相手に喧嘩で負けるという余りにも格好悪い戦績を残したのであった。

レオSIDE

「おいおい、何だアレ？何でフカヒレの奴小学生に喧嘩で負けてる

の？」

カニがジト目でフカヒレを見ながら呟く。

「あの女の子の怯え方から察するに、どうせフカヒレの奴があの娘をナンパして返り討ちに遭ったって所だろ」

「多分それが正解だな、アイツロリコンだし」

それにしてもあの航とかいう奴相手がフカヒレとはいえ、中学生相手に大した度胸だなあ。

取り敢えずあの少年と少女に謝罪するためにフカヒレに近づく。

「れ、レオお、コイツシメてくれよお……」

「……「黙れ変態」……」

「ぶぎゃあ！！？！？」

俺達3人は声を揃えてフカヒレを踏みつけた。

「あ、あの………」

呆然とした様子で少女が口を開く。

「ああ、取り敢えずこの馬鹿がゴメン………こんなでも根は善人だから許してやってくれ」

「は、はあ………」

まだ二人とも呆然としているようだ。言葉だけの謝罪じゃ何だか……あ、そうだ確かフカヒレの財布の中に映画のチケットが……。

「コレお詫びの印だ、二人にやるよ」

「え、でも……」

「良いって良いって、迷惑掛けたのコイツだし」

「じゃ、じゃあ……」

ぎこちなく笑いながら少女はチケットを受け取り、俺達はその場を去ろうとする。

「おい、少年」

去る前に俺は小声で航少年に声を掛けた。

「？」

「守ってやれよ、お前の彼女」

「は、はい！」

俺の言葉に顔を赤くしながらも航少年はしっかりと頷いた。

**番外編 フカヒレVS転生者!! (後書き)**

松上先生、ありがとうございます!!  
ご意見・ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0890y/>

---

つよきす 愛羅武勇伝

2011年11月29日12時51分発行